# 伊勢国分寺跡３

2003年３月
鈴鹿市教育委員会

# 例　言

1. 本書は，国・県費補助事業として鈴鹿市教育委員会が2002(平成14)年度に実施した史跡伊勢国分寺跡記念物保存修理事業にかかる伊勢国分寺跡（第28次）発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体　　鈴鹿市教育委員会（教育長　山下　健）
調査指導　　大場範久（鈴鹿市文化財調査会会長）
川越俊一（奈良文化財研究所）
高瀬要一（奈良文化財研究所）
八賀　晋（三重大学名誉教授）
渡辺　寛（皇學館大学教授）
文化庁文化財保護部記念物課・三重県教育委員会文化財保護チーム
三重県埋蔵文化財センター
調査担当　　鈴鹿市考古博物館
（組織及び構成）　参事兼鈴鹿市考古博物館長　　林　銀哉
副参事兼埋蔵文化財グループリーダー　中森成行
埋蔵文化財グループ指導主事　　北条正則
副主幹　　藤原秀樹
副主査　　鈴木孝幸　田中忠明
嘱託　　吉田真由美　林　和範
臨時職員　　片岡貴美子・神田梢・坂下日向・杉本恭子
別府智子・水谷由起子

3. 調査を実施した個所及び面積は以下のとおりである。
三重県鈴鹿市国分町字堂跡282・283・284・285・286・287・288・290・291・293，西高木229・230
面的調査　1,144.5㎡　　トレンチ調査　746.5㎡　　合計1,891㎡
4. 調査期間は平成14年5月9日～平成15年2月28日である。
5. 現地作業は主に藤原が担当し，林・吉田が補助した。
6. 本書の執筆は藤原・林が分担して行い，文責は文末に記した。編集は藤原が担当した。遺物写真撮影には吉田のほか鈴鹿市考古博物館管理企画グループ副主幹　新田剛が協力した。
7. 調査参加者は以下のとおりである。
瀬戸勝子・永戸清・永戸つや子・永戸尚子・永戸久子・永戸ヒナ子・永戸三代・永戸宗武
8. 遺跡位置図には国土地理院発行の1/25,000地形図「鈴鹿」・「亀山」の一部を使用した。
9. 座標は過去の調査成果と整合性を保つため国土座標第Ⅵ系を用いている。図中の方位は座標北を示す。世界測地系に変換する場合はX座標に346.100m,Y座標に-262.276mを加えるかたちで平行移動されたい。
10. 遺構番号は遺構の種別を示すＳＡ(塀)・ＳＢ（建物）・ＳＣ（通路）・ＳＤ（溝）・ＳＫ（土坑）・ＳＩ（竪穴住居）の記号の跡に発掘年次を示す「02」と２桁の通し番号を付けSD0201のように示した。
11. 調査区は，原則としてブロックの北西角の国土座標のＹ・Ｘそれぞれの下三桁を組み合わせて　251・819のように示している。ただし，南門付近では昨年度設定した６ｍグリッドの地区割も併用している。
12. 本調査にかかる遺物・写真・図面はすべて鈴鹿市考古博物館にて保管している。
13. 調査及び報告書刊行に際して上記指導委員の先生方の他，地元各位はじめ下記の方々のご協力を得た。
石毛彩子・泉雄二・大川勝宏・加藤真二・駒田利治・坂井秀弥・杉谷正樹・禰宜田佳男・山田猛・山中章
吉水康夫

# 目　次

## 本文目次


Ⅰ．はじめに
(1)調査の経緯と経過　1
(2)周囲の環境　2
Ⅱ．調査の成果
1．南門調査区
(1)基本層序　6
(2)検出遺構　6
(3)出土遺物　9
2．塔推定地調査区
(1)基本層序　16
(2)検出遺構　16
(3)出土遺物　18
3．トレンチ調査　31
4．南東隅調査区
(1)基本層序　34
(2)検出遺構　34
Ⅲ．まとめ　38
English Table of Contents and Summary　59
報告書抄録　61


## 図版目次


Fig. 1　伊勢国分寺跡の位置と周辺の遺跡　2
Fig. 2　調査区位置図　3・4
Fig. 3　南門調査区遺構配置図　7
Fig. 4　南門調査区セクション図　8
Fig. 5　SD0143上面瓦出土状況　8
Fig. 6　南門出土軒丸瓦　11
Fig. 7　南門出土軒平瓦(1)　11
Fig. 8　南門出土軒平瓦(2)　12
Fig. 9　南門出土軒平瓦(3)　13
Fig. 10　南門出土鬼瓦　14
Fig. 11　南門出土丸瓦，平瓦，土器　15
Fig. 12　塔推定地調査区遺構配置図(西半)　19
Fig. 13　塔推定地調査区遺構配置図(東半)　20
Fig. 14　SD0210・SK0213遺物出土状況　21
Fig. 15　塔推定地調査区セクション図(1)　22
Fig. 16　塔推定地調査区セクション図(2)　23
Fig. 17　SD0244遺物出土状況　23
Fig. 18　塔推定地調査区出土軒丸瓦(1)　24
Fig. 19　塔推定地調査区出土軒丸瓦(2)・鬼瓦　25
Fig. 20　塔推定地調査区出土軒平瓦(1)　26
Fig. 21　塔推定地調査区出土軒平瓦(2)　27
Fig. 22　塔推定地調査区出土刻印平瓦　28
Fig. 23　塔推定地調査区出土刻印丸瓦・平瓦・丸瓦　29
Fig. 24　塔推定地調査区出土土器　30
Fig. 25　回廊東部トレンチ　32
Fig. 26　回廊西部トレンチ　33
Fig. 27　講堂東部トレンチ　33
Fig. 28　南東隅調査区遺構配置図　35
Fig. 29　SB0220平面図　36
Fig. 30　南東隅調査区セクション図(1)　36
Fig. 31　南東隅調査区セクション図(2)　37


## 表目次


Tab. 1　伊勢国分寺跡発掘調査履歴　5


## 写真目次


Plate 1　南門全景／塔推定地調査区全景　40
Plate 2　塔推定地調査区／南東隅調査区全景　41
Plate 3　南門全景／作業風景／瓦堆積状況
外周溝SD0143　42
Plate 4　溝SD0143サブトレンチ／外周溝SD0142
土坑SK0148／D～F-8調査区全景
外周溝SD0144／現地説明会　43
Plate 5　塔推定地調査区／築地SA0203／築地SA0206
掘立柱建物SB0232/竪穴住居SI0231　44
Plate 6　道路状遺構SC0204/竪穴状土坑SI0235・0236
溝SD0244／溝SD0205瓦出土状況
土坑SK0239～0242／築地SA0219
溝SD0217サブトレンチ／土坑SK0242サブトレンチ　45
Plate 7　溝SD0205サブトレンチ／溝SD0209サブトレンチ
溝SD0215・0216サブトレンチ／溝SD0217サブトレンチ
回廊西No.4トレンチ／堀立柱建物SB0280　46
Plate 8　回廊東トレンチ全景／土坑SK0287・SK0288
土坑SK0283・溝SD0290・0291／土坑SK0285・溝SD0297
回廊東No.5トレンチ／回廊東No.2トレンチ／回廊東No.1トレンチ　47
Plate 9　掘立柱建物SB0220／築地SA0224
溝SD0223サブトレンチ／溝SD0221サブトレンチ
SB0220Pit16・10　48
Plate 10　南門調査区出土軒丸瓦/軒平瓦　49
Plate 11　南門調査区出土軒平瓦/鬼瓦　50
Plate 12　南門調査区出土鬼瓦/丸瓦/平瓦
塔推定地調査区出土軒丸瓦　51
Plate 13　塔推定地調査区出土軒丸瓦　52
Plate 14　塔推定地調査区出土軒丸瓦/鬼瓦　53
Plate 15　塔推定地調査区出土軒平瓦　54
Plate 16　塔推定地調査区出土軒平瓦　55
Plate 17　塔推定地調査区出土軒平瓦/刻印瓦　56
Plate 18　塔推定地調査区出土刻印瓦　57
Plate 19　塔推定地調査区出土土器/丸瓦/平瓦　58

# Ⅰ．はじめに

## 1. 調査の経緯と経過

伊勢国分寺跡は鈴鹿川左岸の台地上，鈴鹿市国分町字堂跡・西高木・西谷に所在する。大正11(1922)年10月12日に国史跡に指定されている。

昭和63(1988)年度から平成2(1991)年度にかけ，鈴鹿市教育委員会によって史跡整備を前提とした範囲確認調査が実施された。その結果，伽藍地は築地塀に囲まれ，ほぼ180m四方の規模であることが確認された。鈴鹿市ではその成果をもとに，平成7(1995)年度から三ヵ年で史跡公有地化を完了した。また，ガイダンス施設を兼ねた鈴鹿市考古博物館を隣接地に建設し,平成10(1998)年10月に開館した。

平成11(1999)年度から新たに，史跡整備計画策定に必要な中心伽藍の位置・規模の確定を目的とした史跡指定地内の調査に着手した。平成11・12年度は市の単費事業として,平成13年度からは国・県費補助を受け「史跡伊勢国分寺記念物保存修理事業」として実施している。

平成11年度の第22・23次調査は，史跡碑が建ち基壇状の高まりが残る推定講堂跡を対象として実施した。結果として,高まりは大部分が後世の土寄せによるものであったが，下層から基壇を検出し,東西規模が約33mであることを確認した。

平成12(2000)年度の第24次調査では，講堂基壇の南北規模約21mを確認し,基壇化粧の基底と見られる塼・瓦の列と軒先から落下した状態の軒瓦を検出した。金堂の調査も平行して実施し,基壇は講堂基壇から南に22m離れて確認され,東西約31m×南北約22mの規模であることが確認された。

平成13(2001)年度の第25次調査では，中門・回廊の確認が行われた。金堂基壇から南に約31m離れて，中門基壇を確認した。基壇は削平され基礎地形の最下部がかろうじて残存するのみであった。規模は東西19.5m×南北12mを測る。回廊も削平され，基壇や礎石等は残らないが外周溝によって規模が確認された。東西68m×南北51m，幅7mで中門と金堂を結び金堂院を形成する。さらに，南門の調査にも着手したが，例年遺構明示のために行っている菜の花の植栽が重複しているため，調査は平成14(2002)年度春に植栽が終了するのを待って継続することになった。

本年，平成14年度の第28次調査は史跡指定地内調査の4年次目にあたる。調査方針として前年度から継続する南門の調査を完了し，さらに全く所在が不明である塔基壇の確認に努めることとした。

南門の調査は5月9日に現地作業に着手し，22日に作業員による掘削と遺構検出作業が完了した。その後遺構実測作業とサブトレンチ調査を行い，7月4日にはラジコンヘリによる航空写真撮影，5日には調査指導委員会による検討を行って調査を締めくくった。7月10日には南門の調査成果を報道機関に発表し，21日には市民を対象とした現地説明会を開催し，45名の参加があった。

塔の調査は，まず金堂東側に多く瓦の散布する地点があり，ここを最有力候補とみて「塔推定地調査区」を設けた。5月19日に地区割の杭打ちを行い，22日から作業員を投入した。かって水田として利用されていたため床が堅く,また過去の耕地整理の際に撹乱された瓦が厚く堆積していて作業は困難を極めた。調査の結果，2条の築地とみられる遺構が確認されたが,塔基壇は確認できなかった。

そのため塔推定地調査区の南側に6条，北側に2条，回廊西側に1条のトレンチを小型重機を併用して入れた。結果として塔やそれに関連する瓦溜り等は検出されなかった。しかし，伽藍地南東隅に設定したトレンチで大型掘立柱建物の柱穴を検出したため，国分寺に関連する重要遺構と見てその範囲を「南東隅調査区」として追加調査を行った。

作業員は8月1日から9月1日のトレンチ調査および9月30日から11月4日の遺構実測期間の中断をはさみ11月15日まで投入した。12月16日には第2回の調査指導委員会を開催し成果を検討し,18日に調査成果を報道機関に発表した。22日には市民を対象とした現地説明会を開催し，30名の参加があった。

全ての調査は2月28日を持って完了した。調査期間中には，全国史跡整備市町村協議会大会・大規模遺跡調査連絡協議会・北勢四市文化財調査会協議会の視察を受けたほか，小・中学校また大学の授業の一環としての見学および教員研修等に活用していただいた。　（藤原）

## 2. 周辺の環境

伊勢国分寺跡(1)の周辺には関連する律令期の遺跡が多数立地している。国分寺跡の南東0.5ｋｍに立地する南浦遺跡(5)はかっては伊勢国分尼寺跡とされていたが，平成2年度からの調査で国分寺に先行する白鳳寺院の可能性が高いとされ大鹿（南浦）廃寺と命名された。今のところ確実な伽藍遺構は確認されていない。また，同遺跡からは平成10年の調査により大形の掘立柱建物が著しく重複して検出され，豪族居宅や官衙と複合している可能性が考えられる。大鹿（南浦）廃寺に瓦を供給したのは，浪瀬川の谷を挟んで南西1kmに位置する山辺瓦窯跡(8)であることが確認されている。

国分寺跡の南側に隣接する狐塚遺跡では，平成6年度の考古博物館建設に先立つ発掘調査により，台地の先端部を区画する柵列と区画内に整然と配列された倉庫群が検出され，河曲郡衙の正倉院と考えられている。谷を挟んだ東側でも掘立柱建物群が検出され，郡衙政庁や曹司の一部と見られている。

国分寺跡から東に0.5kmの現国分町の集落下には国分遺跡(2)が立地する。出土する瓦等から伊勢国分尼寺跡の有力候補とされているが，伽藍遺構は未確認である。同遺跡から出土する瓦と同笵の瓦は，西約４kmに位置する川原井瓦窯跡(20)で生産されていたことが確認されている。

国分寺と最も関連の深い伊勢国の国府跡は，国分寺跡から西に7kmに位置する長者屋敷遺跡(24)であることが確認されている。平成4年度からの調査により政庁遺構や大形瓦葺礎石建物群が検出され，奈良時代後半の伊勢国府跡であることが明らかになった。平成14年3月19日には主要な3地点約70,000㎡が国史跡に指定された。ただし，この国府は奈良時代末から平安時代初頭には廃絶したとみられ，鈴鹿川の対岸に地名として残る「国府」地区に移転したと考えられている。国府地区では三宅神社遺跡(27)など奈良時代後半から平安時代にかけての大規模な遺跡が確認されつつあるが後期国府の実態はまだ明らかになっていない。

（藤原）

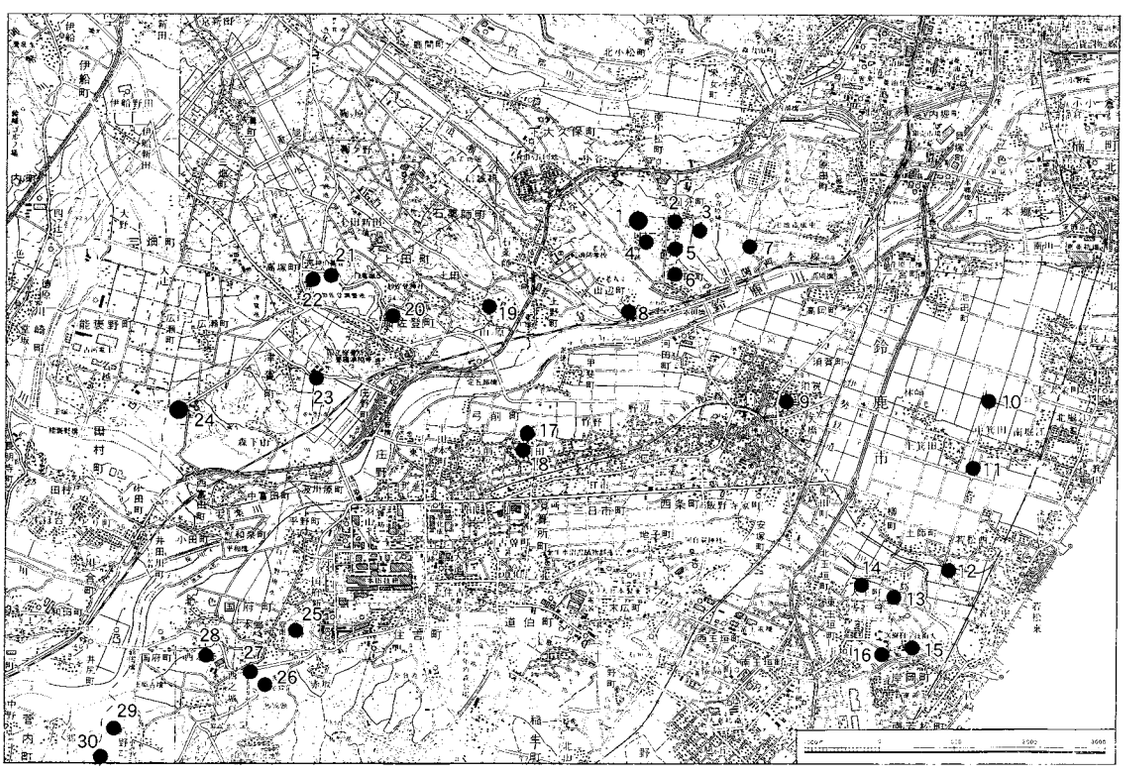


Fig. 1　伊勢国分寺跡の位置と周辺の遺跡（1：100,000）

1. 伊勢国分寺跡　2. 国分遺跡（国分尼寺推定地）　3. 国分東遺跡　4. 狐塚遺跡（河曲郡衙跡）　5. 南浦遺跡（大鹿廃寺）　6. 木田坂上遺跡　7. 寺山遺跡
8. 山辺瓦窯跡　9. 須賀遺跡　10. 大木ノ輪遺跡　11. 上箕田遺跡　12. 上師南方遺跡　13. 双ツ塚遺跡　14. 深田遺跡　15. 天王遺跡　16. 天王屋敷遺跡（廃寺）
17. 岡田遺跡　18. 岡田南遺跡　19. 山ノ原遺跡　20. 川原井瓦窯跡・川原井遺跡　21. 北野古墳　22. 大欠積石遺跡　23. 津賀平遺跡
24. 伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）　25. 梅田遺跡　26. 天王山西遺跡　27. 三宅神社遺跡　28. 国府八遺跡　29. 八野遺跡　30. 八野瓦窯跡

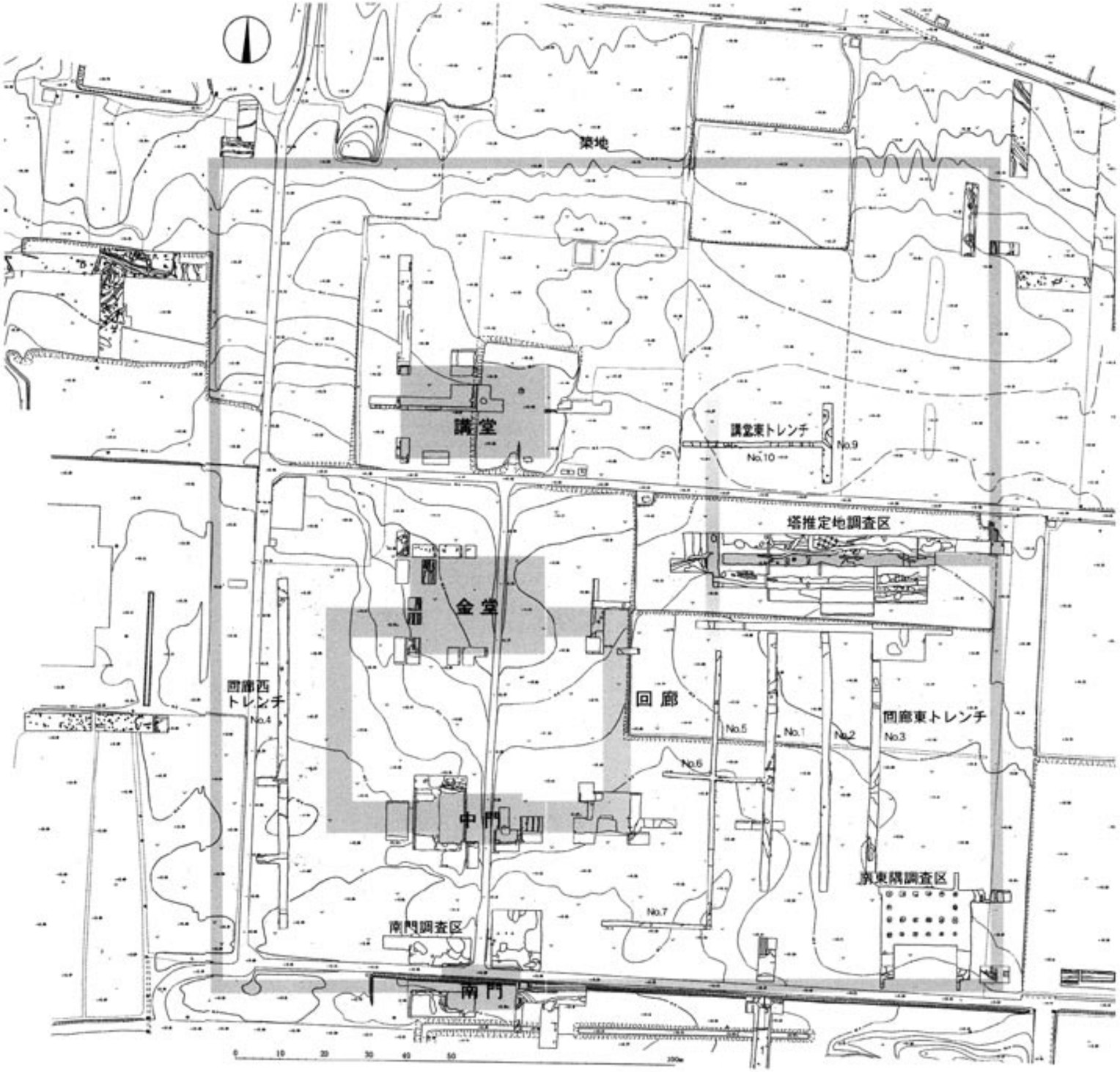



Fig. 2　調査区位置図（1：1,000）

| 次数 | 調査年度 | 遺跡名 | 調査期間 | 面積(m²) | 調査原因 | 概要 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 次 | 1988 | 伊勢国分寺跡 | 880920～881215 | 450 | 学術 | 国分寺築地・掘立柱建物・竪穴住居 |
| 2 次 | 1989 | 伊勢国分寺跡 | 891002～891219 | 470 | 学術 | 国分寺築地 |
| 3 次 | 1990 | 伊勢国分寺跡 | 901011～901223 | 352 | 学術 | 竪穴・掘立柱建物・国分寺南門・築地 |
| | | 南浦遺跡 | | 150 | | 掘立柱建物 |
| 4 次 | 1991 | 伊勢国分寺跡 | 911002～911225 | 80 | 学術 | 土坑 |
| | | 南浦遺跡 | | 545 | | 瓦溜・掘立柱建物 |
| 5 次 | 1992 | 南浦遺跡 | 920907～921105 | 200 | 学術 | 大鹿山6号墳・瓦溜 |
| | | 国分南遺跡 | | 80 | | 溝 |
| 6 次 | 1993 | 国分西遺跡 | 930913～931124 | 338 | 学術 | 瓦溜・鬼瓦 |
| | | 国分遺跡 | | 19 | | ピット |
| | | 伊勢国分寺跡 | | 142 | | 溝 |
| 7 次 | 1994 | 伊勢国分寺跡 | 940523～940731 | 3,500 | 博物館 | 大型掘立柱建物 |
| | | | 941201～950131 | | | 掘立柱建物・古墳周溝 |
| 8 次 | 1994 | 国分遺跡 | 940801～941030 | 300 | 学術 | 尼寺北限溝・鬼瓦・瓦塔 |
| | | 国分西遺跡 | | 8 | | なし |
| 9 次 | 1994 | 伊勢国分寺跡 | 950105～950228 | 1,200 | 博物館 | 掘立柱建物（倉庫）・掘立柱塀 |
| 10次 | 1995 | 狐塚遺跡 | 950803～951016 | 880 | 学術 | 掘立柱建物（河曲郡衙正倉）・竪穴住居 |
| | | | | | | 古墳周溝 |
| 11次 | 1995 | 伊勢国分寺跡 | 950510～950728 | 1,200 | 博物館 | 溝・土坑・掘立柱建物 |
| 12次 | 1995 | 狐塚遺跡・ | 950626～960111 | 2,170 | 博物館 | 掘立柱建物 |
| | | 伊勢国分寺跡 | | | (進入路) | 掘立柱建物・竪穴住居 |
| 13次 | 1996 | 伊勢国分寺跡 | 960415～970306 | 3,100 | 博物館 | 掘立柱建物 |
| | | 狐塚遺跡 | | | (進入路・駐車場) | 大型掘立柱建物 |
| 14次 | 1996 | 伊勢国分寺跡 | 960605～961002 | 850 | 博物館 | 溝・土坑 |
| 14-2次 | 1996 | 国分遺跡 | 970221～970221 | 12 | 寺院 | 土坑 |
| 15次 | 1996・1997 | 伊勢国分寺跡 | 970307～970425 | 650 | 博物館 | 溝・掘立柱柵 |
| 16次 | 1997 | 国分南遺跡 | 970424～970531 | 1,140 | ビニールハウス | 掘立柱建物・鋳造遺構 |
| 17次 | 1997 | 南浦遺跡 | 970617～970816 | 830 | ビニールハウス | 掘立柱建物・鬼瓦 |
| 18次 | 1997 | 伊勢国分寺跡 | 970918～971204 | 680 | 博物館(外周道路) | 掘立柱建物（河曲郡衙正倉） |
| 19次 | 1997 | 伊勢国分寺跡 | 970929～980214 | 3,000 | 農地造成 | 掘立柱建物・中世墓・古墳 |
| 20次 | 1997 | 狐塚遺跡 | 980304～980316 | 90 | 土地造成 | 掘立柱建物 |
| 21次 | 1998 | 狐塚遺跡 | 980805～980809 | 1,129 | 農地造成 | 竪穴住居・掘立柱建物 |
| 22次 | 1999 | 伊勢国分寺跡 | 990715～990930 | 153 | 学術（市単） | 国分寺講堂 |
| 23次 | 1999 | 伊勢国分寺跡 | 000204～000331 | 132 | 学術（市単） | 国分寺講堂 |
| 24次 | 2000 | 伊勢国分寺跡 | 000508～000919 | 216 | 学術（市単） | 国分寺講堂・金堂 |
| 25次 | 2001 | 伊勢国分寺跡 | 010514～011031 | 1,100 | 学術（国補） | 国分寺中門・回廊 |
| | | | 020207～020312 | | | 国分寺南門・竪穴住居・掘立柱建物 |
| 26次 | 2001 | 国分西遺跡 | 010703～010704 | 16 | 個人住宅 | 土坑・溝 |
| 27次 | 2001 | 国分西遺跡 | 020115～020131 | 98 | 個人住宅 | 土坑・掘立柱建物・溝・鋳造関係遺構 |
| 28次 | 2002 | 伊勢国分寺跡 | 020509～030228 | 1,891 | 学術(国補) | 国分寺南門・築地 |
| | | | | | | 大型掘立柱建物・竪穴住居 |
| 合計 | | | | 27,401 | | |

Tab.1　伊勢国分寺跡発掘調査履歴

# Ⅱ．調査の成果

## 1. 南門調査区

南門については，1990年度第3次調査西高木2地区の調査の際に，テラス状遺構SX01が確認され，これが基壇の南東隅にあたると推定されていた。昨年，2001年度の第25-2次調査において，基壇規模を確定するため3ヶ所の調査区を設定して調査を行い，基壇外周溝等を検出した。ただし，着手が2月中旬となり調査期間に制約があったこと，調査予定地の一部に南門の推定位置を示すための菜の花の植栽が行われ，ちょうど盛りの時期であったため，詳細の調査と植栽部分の拡張および記録についてはこの第28次調査に継続して行うこととなった。

なお調査に際しては第25次の中門・回廊調査の際に用いた，便宜的にX=51747.0　Y=-121300.0を原点とした6m方眼を設定し東へ1･2･3･･･，南へA･B･C･･･の番号を付ける地区割を採用している。

### (1)基本層序

D~F-6区では地表は褐灰色土または灰黄色土の耕作土があり。その下層には明黄褐色粘質土または黄褐色土の耕地整理に際しての整地層がみられる。E-6区では整地層の下層に大量の瓦堆積がみられた。当初は雨落ち溝と考え精査していたが下部からビニール等が出土したため，耕地整理の際に不要な瓦を下層に埋め込んだものと判断して一括して取り上げた。この盛地層を除去すると橙色土の地山(基盤層)となり，この層の上面で遺構が確認される。

G~H-5～6区では褐灰色土の現耕作土を除去すると直ちに橙色土の地山となる。

E~F-8区では，地表には，博物館ガイダンス広場造成の際の残土を均した，砂利混じりの黄褐色粘質土が厚く堆積している。それを除去すると旧耕作土の褐色粘質土層が薄く広がり，その下層が明黄褐色土の地山となる。

### (2)検出遺構(Fig.3)

**南門SB0140**　南門基壇は更に著しく削平され柱穴，礎石据え付け痕はもちろん地下の基礎地形も殆ど残存していない。E･F-8区の基壇部分ではわざわざ地山以下まで大きく抉って土を入れ替える土壌改良(攪乱土坑)も行われていた。わずかにE-7区の北辺部分で地山上に明黄褐色土とにぶい黄褐色土の互層がみられ，これが唯一基礎地形の最下部である可能性がある。そのため，基壇の形状は外周の溝SD0143・SD0142・SD0144そして第3次調査の溝SD05に囲まれた地山部と判断せざるを得ない。

基壇の形状は，中門と異なり長方形の四隅を斜めに切り落としたような東西に扁平な八角形状を呈する。南北幅は11.2m，東西幅は基準の求め方によってやや差が出るがテラス状遺構SX01の東辺と柱穴列SA0153との間とすれば17.6m，北辺は15.5m，東辺およそ7.5mを測る。

E-6区の基壇の北辺上に2基のピットが検出された。足場穴の可能性が考えられる。ピット間の距離は2.4mである。

**柱列SA0153**　基壇西辺に添うように，方形のピット2基が南北に並んでいる。基壇と築地外溝SD0151埋土の両方を切っている。位置的に足場穴の可能性も考えられるが，それにしてはやや大きすぎるため性格は不明である。

**築地SA0141**　大部分が道路下にあるため，D･E･F-8区で南辺のみが延長約7mにわたり検出された。全く削平され，基底の地山面が検出されるのみである。南門の西辺中央に取り付くと仮定して折り返すと基底部幅3m弱が求められる。

**溝SD0142**　南門の外周溝である。道路下の推定築地内溝から連続すると見られる。やや北に振りながらH-7区南辺に現れると，60°北西に曲がる。この部分は幅約1.6m程で，約3m北西に延びる。そして，再び60°西に振って西進する。このコーナー部から軒丸瓦が出土した。この東西方向の溝では幅2.2mと広いが，コーナーから約4.8m西の地点で急に1mに狭まる。ちょうど南門中心の北面にあたるためこの狭まった部分は南門と中門を結ぶ通路を意識したものと考えられる。

**溝SD0143**　SD0142に続く溝と考えられる。F-6区東壁では幅約1m，深さ0.6mの逆台形を呈する。東壁から1.5mほど幅1mを保った後，急に広がって東壁から2mの地点で幅2.2mへと広がる。これはG-6区のSD0142の狭まりと対応するもので,両者の距離はほぼ7.2mである。さらに，東壁から6.2mの地点で60°南に曲がりD・E-7区南壁へと至る。このコーナー部分では遺物の残りが良く，検出面の高さで軒瓦を含む瓦溜まり(Fig.5)が見られる。D･E-7区南壁で幅2.4m，深さ0.6mの皿状を呈する。上面の瓦溜り

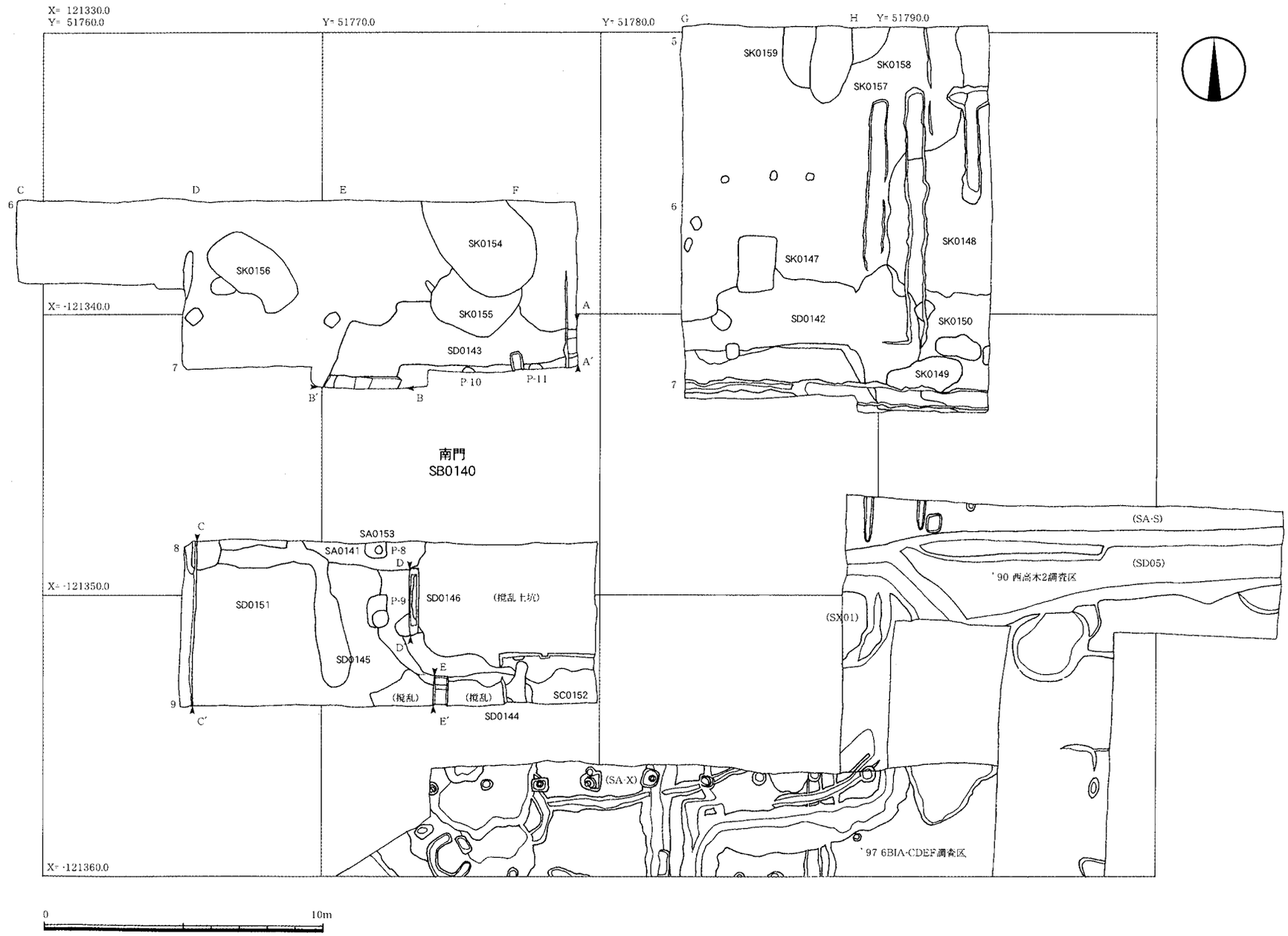
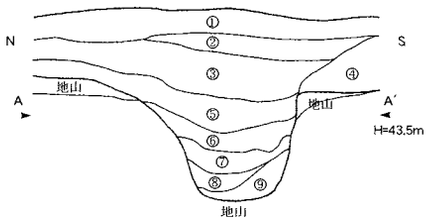


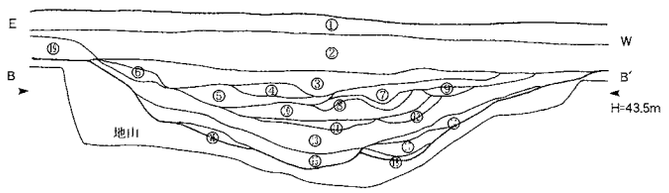

Fig. 3　南門調査区遺構配置図（1：200）

## SD0143　東サブトレンチ

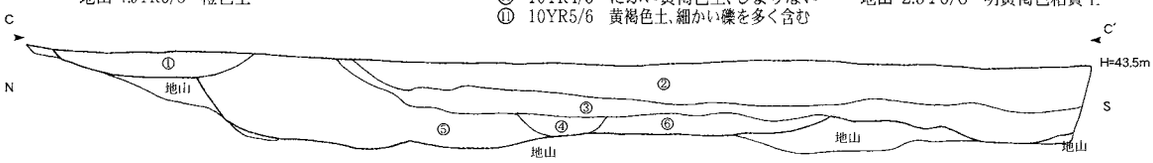



① 10YR5/1　褐灰色土(耕作土)
② 10YR5/1　褐灰色土(旧耕作土)
③ 10YR6/8　明黄褐色粘質土(整地土)
④ 7.5YR4/4　褐色土
⑤ 7.5YR4/4　褐色土、しまりがない
⑥ 7.5YR4/3　褐色土、よくしまる
⑦ 7.5YR5/8　明黄褐色土、やや砂粒多く瓦細片含む
⑧ 7.5YR4/6　褐色粘質土、しまりなく、瓦、礫含む
⑨ 10YR6/8　明黄褐色粘質土
地山 7.5YR6/8　橙色土

## SD0143　南サブトレンチ



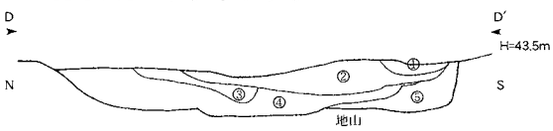

① 10YR5/2　灰黄褐色(耕作土)
② 10YR5/6　黄褐色土、下面に瓦を多く含む(整地層)
③ 2.5Y5/6　明黄褐色土、細砂質(整地山砂)
④ 2.5Y4/6　オリーブ褐色土、しまる
⑤ 7.5YR4/4　褐色土
⑥ 2.5Y6/6　明褐色土、しまりない
⑦ 10YR4/4　褐色土
⑧ 7.5YR6/8　橙色土、赤み強く地山土に近い
⑨ 7.5YR6/8　橙色土、赤み強く地山土に近い
⑩ 10YR4/3　にぶい黄褐色土、しまりない
⑪ 10YR5/6　黄褐色土、細かい礫を多く含む
⑫ 10YR5/6　黄褐色土、細かい礫を多く含む
⑬ 7.5YR4/4　しまりなく瓦を多く含む
⑭ 10YR4/6　褐色土、粘質でカーボン粒多く含む
⑮ 7.5YR6/8　明黄褐色土、やや砂質
⑯ 10YR5/2　にぶい黄褐色土
⑰ 2.5Y6/8　明黄褐色土
⑱ 10YR6/6　明黄褐色土
⑲ 10YR6/9　明黄褐色土と 10YR5/4 にぶい黄褐色土の互層
地山 2.5Y6/8　明黄褐色粘質土




## SD0151　西サブトレンチ

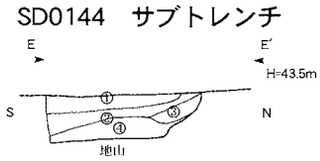
① 10YR5/8　黄褐色土
② 10YR5/6　黄褐色土、粘質
③ 10YR6/4　にぶい黄褐色土、やや粗い砂粒多く、瓦大量に含む
④ 10YR6/4　にぶい黄褐色土、瓦大量に含む
⑤ 2.5Y6/4　にぶい黄色土、鉄・マンガン粒多く、瓦を含む
⑥ 2.5Y5/6　黄褐色土、しまりなく瓦を含む
地山 明黄褐色土

## SD0146　サブトレンチ




① 10YR4/6　褐色土と 10YR6/6 明黄褐色土の互層
② 10YR6/6　明黄褐色土
③ 7.5YR6/8　褐色土、カーボン粒を含む
④ 10YR4/6　褐色土と 7.5YR6/8 橙色土の互層、しまりない
⑤ 10YR6/8　明黄褐色土、よくしまる
地山 2.5Y6/8　明黄褐色土

## SD0144　サブトレンチ




① 2.5Y4/4　オリーブ褐色土と 2.5Y6/8 明黄褐色土の互層(撹乱層)
② 10YR4/4　褐色土層
③ 10YR4/4　褐色土層に 2.5Y6/8 明黄褐色土ブロックが混じる
④ 2.5Y6/8　明黄褐色土に 10YR4/4 褐色土が薄い層状に入る
地山 2.5Y6/8　明黄褐色土

0　2m

Fig. 4　南門調査区セクション図（1：40）

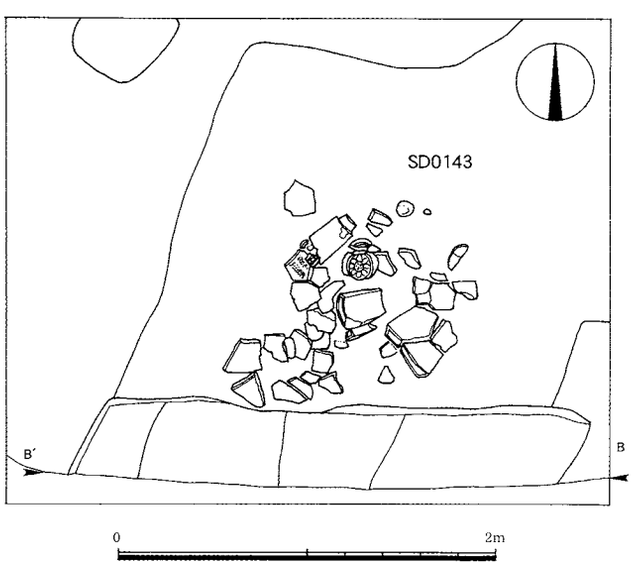



Fig. 5　SD0143上面瓦出土状況（1：40）

とは別に下層底部近くからも密ではないが瓦を含んでいる。

**溝SD0144**　南門の外溝である。南側は調査区外のため幅は不明。西側は築地外周溝SD0151に切られている。南門前を完全に遮断せず，南門南西隅から約4.5m東に延びて途絶えるため。南門中央前面は陸橋状(SC0152)を呈する。

**溝SD0145**　D-8調査区西壁から築地SA0141に沿うように5m東へ延び,南へ折れて4mほどで途切れる。瓦細片や円礫を含み後世の地境溝であろう。

**溝SD0146**　南門基壇下で検出された溝。幅2.2m，深さ0.25mの断面皿状の溝。築地外周溝SD0151に切られている。

**溝SD0151**　築地SA0141の外溝にあたるが，南北幅が5mを越え更に南に広がる土坑状の溝である。D-8区調査区西壁では深さ0.6mあまりで，底面はほぼ平坦である。断面の観察では本来の外溝は築地よりの幅約４mほどとみられる。築地から1mほど南の地点から，2層からなる土坑状の溝が切り込んで，調査区南壁に及んでいる。いずれも大型の瓦破片を多く含む。

**土坑SK0147**　溝SD0142を切る。南北2m，東西1.3mの方形土坑で，外周に焼土，炭がわずかに見られる。

**土坑SK0148**　H-5･6区東壁に沿って検出された。5m×3.5m以上の隅丸方形の土坑とその北側に連続する土坑からなる。瓦破片を密に含み瓦廃棄土坑とみられる。上面の撹乱部分の瓦を取り上げたのみであるが，鬼瓦や軒瓦が出土している。

**土坑SK0149**　一部がSD0142を切っている。東西2.8m，南北1.2mの長楕円形の瓦溜土坑である。SD0142の上層瓦溜が部分的に残存したものか。

**土坑SK0150**　0.7m×0.5mの柱穴状のピットである。対応するピットは確認できなかった。

**土坑SK0154・SK0155**　E-6区で検出された。いずれも不整な楕円形を呈する。SK0155は溝SD0143を切り,SK0154はSK0155を切る。多くの瓦を含む瓦処理土坑である。

**土坑SK0156**　D-6区で検出した。3.2m×1.5mの長楕円形の土坑である。C・D-6区あたりは耕作による削平が著しく，周辺の遺構も痕跡的に残っているのみである。

**土坑SK0157～0159**　G-5区の北辺にかかって検出された。長楕円形の土坑3基が重複している。いずれも瓦の細片を多く含み，瓦処理土坑であろう。

**(3)出土遺物**

出土遺物は土嚢袋で百袋以上が出土しており大半が平・丸瓦の破片である。出土した軒瓦・鬼瓦はすべて図示した。平・丸瓦は遺構のサブトレンチ出土のものを除けば，ほとんどが細片で復元可能なものは極めて少ない。塼はほとんど見られない。

**軒丸瓦**(Fig.6)　(1・12)はSD0143コーナー部出土。(2)はSD0142コーナー部出土。(5・11)はSK0148上面出土。(13)はSK0156上面出土。その他は表土または撹乱層の出土である。(2～4・6・7・10)は単弁八葉蓮華文軒丸瓦でⅡA03型式である。(1・5・9)は単弁八葉蓮華文軒丸瓦ⅡA04型式で，ⅡA03型式の笵を掘り直したものあることが確認されている。(8・10～13)はⅡA03またはⅡA04型式の外縁を削り取ったものとみられる。(註1)

**軒平瓦**(Fig.7～9)　(14・18・20・22)はSD0143コーナー部出土。(21・23)はSK0148上面出土。その他はE-6区を中心とした撹乱層からの出土である。(14)～(20)は均整唐草文ⅡB02型式である。(21)～(25)は均整唐草文ⅡB01型式で，瓦当面左隅の大きな笵傷が特色である。(28)は新たに確認された唐草文軒平瓦で，かなり退化した型式である。

**丸瓦**(Fig.11)(34)はSD0151のサブトレンチ出土。玉縁式。焼きは極めて悪い。

**平瓦**(Fig.11)(35)はSD0151のサブトレンチ出土。焼きは極めて悪い。　(藤原)

**鬼瓦**(Fig.10)　(29・30)はSK0148上面出土。(31)はF-6区SD0143およびSK0154・SK0156をおおう撹乱層からの出土。参考として1998年に南門付近から出土したとされる(32)と，昨年度の中門付近表土から出土した(33)を載せる。

(29)は鬼面文鬼瓦の鼻から口にかけての破片である。４本の上歯の右２本から右上牙にかけて刳り込みの面が一部残る。上部の欠損面には左右の眼窩の痕跡が見られ，鼻は剥離するが両鼻翼の痕跡のみ残存する。伊勢国分寺Ⅰ式(註2)である。

(30)はおそらく伊勢国分寺Ⅱ式の右眉であると思われる。

(31)は左側下方の破片で左側縁，底，刳り込みの面が残り，巻毛が１単位残存する。裏面はヘラケズリで整えられる。伊勢国分寺Ⅱ式である。

(32)額左側の破片である。２単位の巻毛の表現があり，毛額中央の珠文が剥落した痕跡をとどめる。眼窩も一部

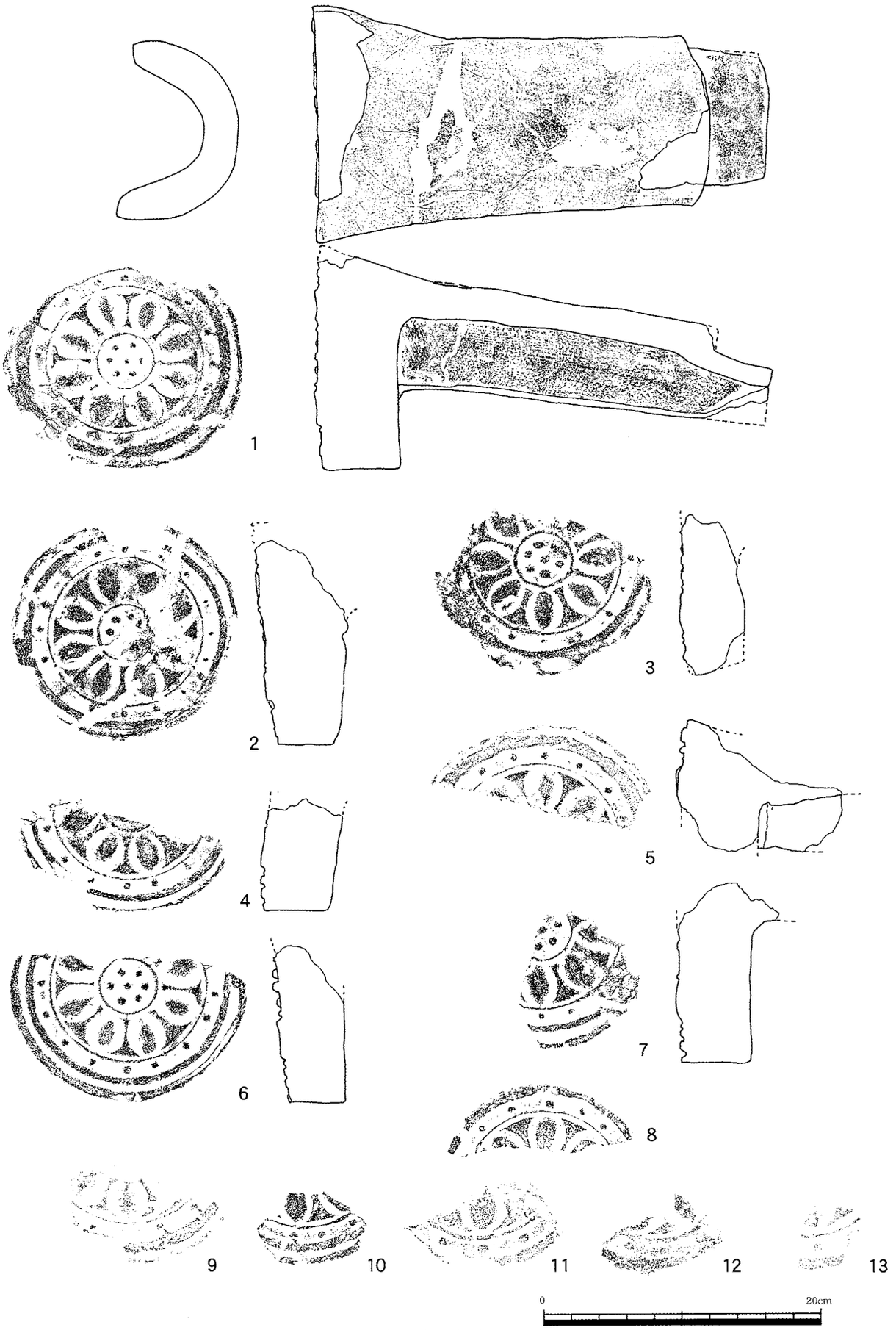



Fig. 6　南門出土軒丸瓦（1：4）

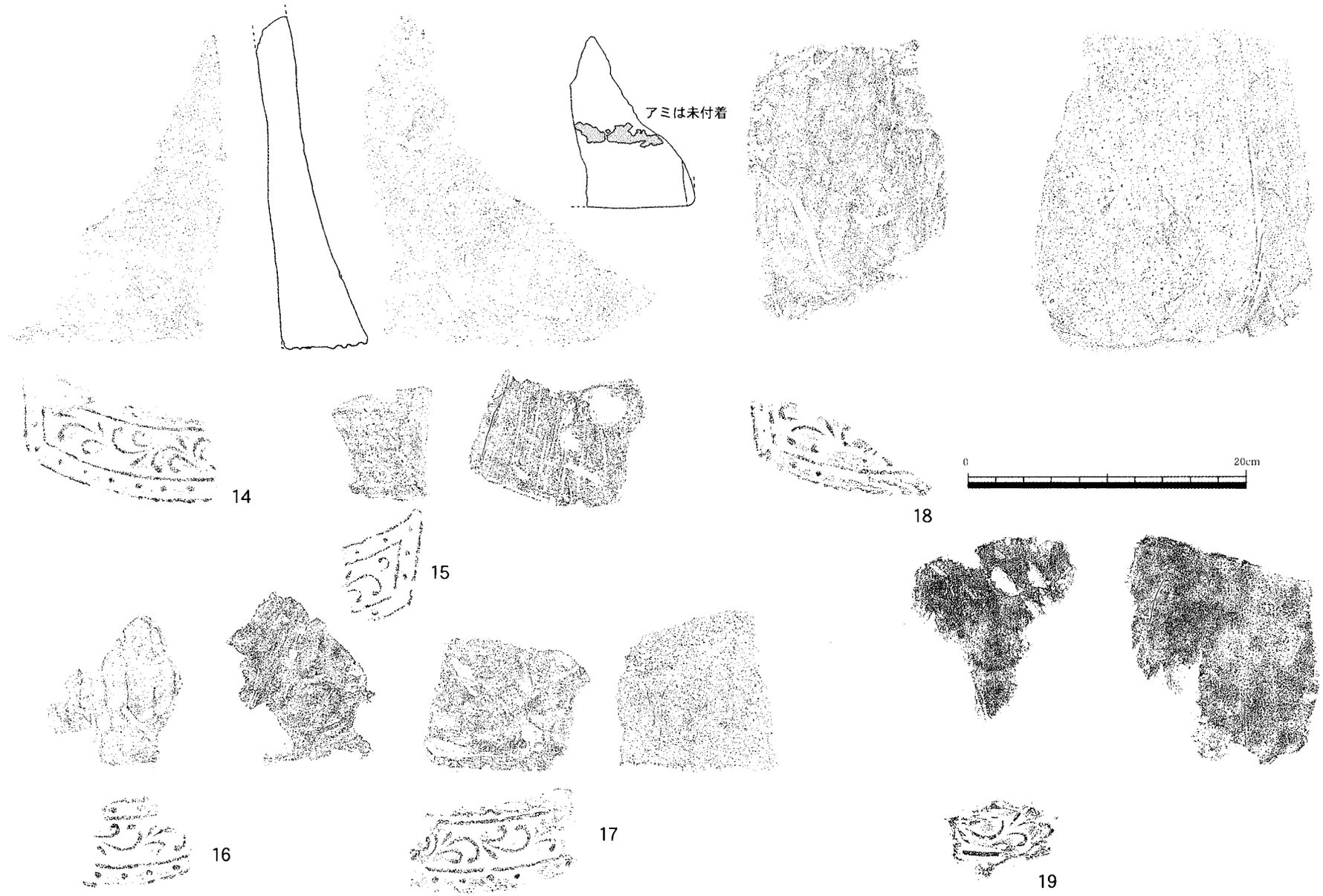



Fig. 7　南門出土軒平瓦（1）（1：4）

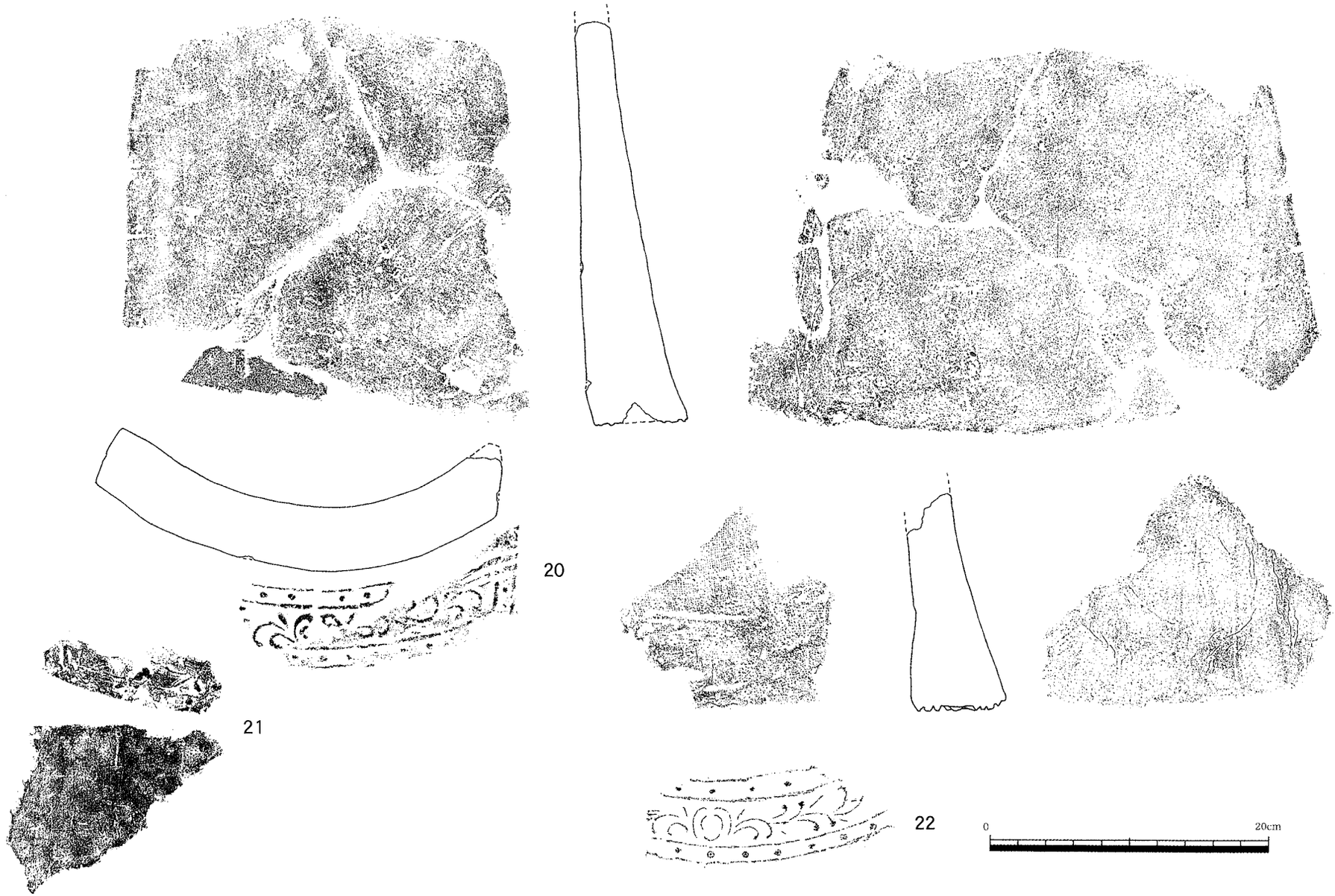



Fig. 8　南門出土軒平瓦（2）（1：4）

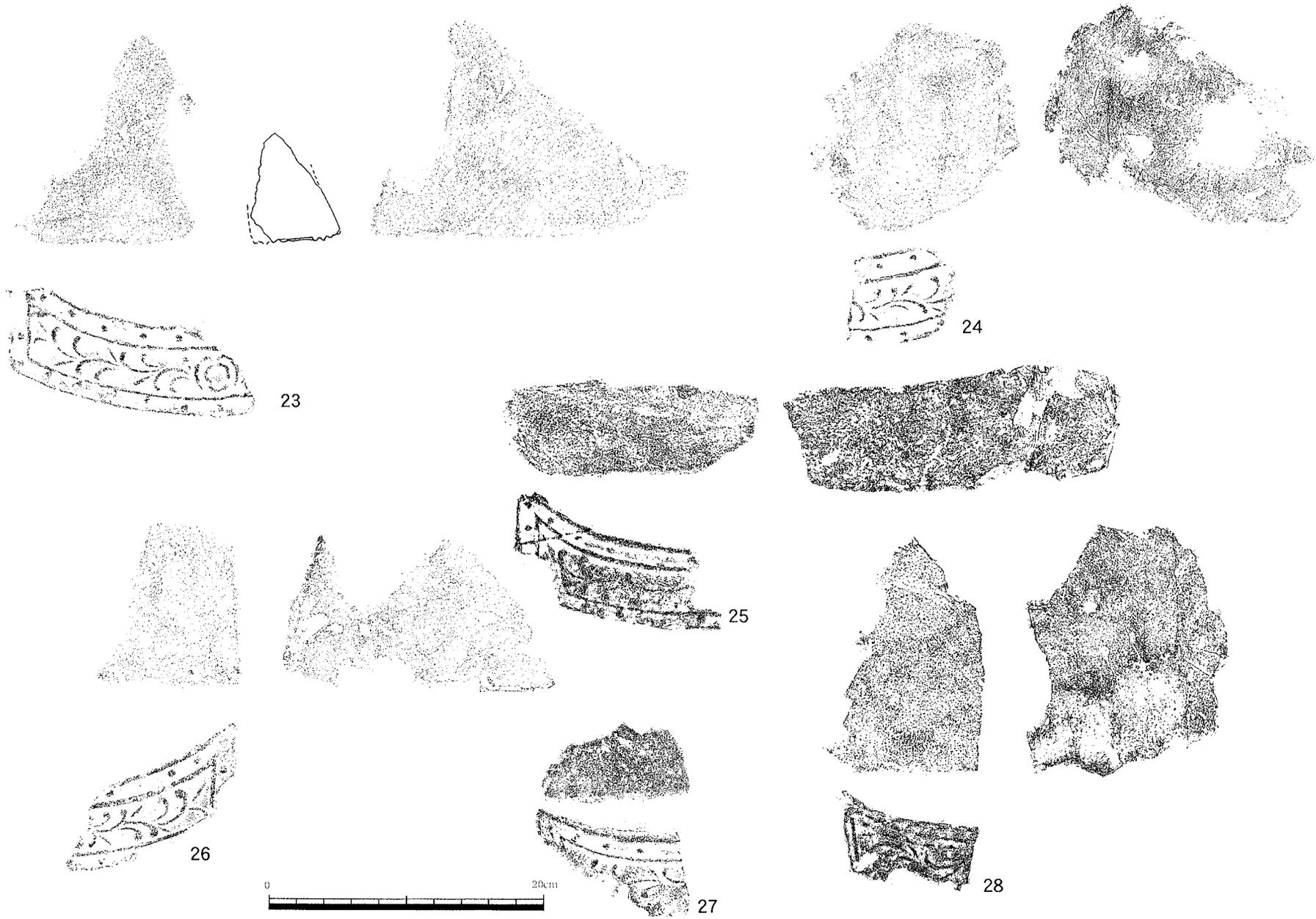



Fig. 9　南門出土軒平瓦（3）（1：4）

残存する。制作時の小粘土塊の接合痕（点線で描画）が明確に観察できる。伊勢国分寺Ⅰ式である。

(33)は伊勢国分寺Ⅱ式の左眉である。　　（林）

**須恵器**(Fig.11)（36・37)いずれも撹乱層出土。(36)は坏の底部。(37)は盤の底部か。

**灰釉陶器**(Fig.11)（38)表土出土。椀の底部である。

（藤原）

（註1）ここで用いる伊勢国分寺系の軒丸・軒平瓦の分類は新田剛2002『伊勢国分寺跡１』鈴鹿市教育委員会に基づく。

（註2)鬼瓦については上記においても未だ分類は試みられていない。伊勢国分寺・国府系の鬼瓦の分類については今後の課題とし，ここでは東海地方の鬼瓦を体系的に論じた前田清彦2000「東海地方の古代の鬼瓦とその系譜」『三河考古』第13号の分類を暫定的に用いる。

（註3）以下，鬼瓦の左右を記述する際は図上の左右，すなわち向かっての左右を表すものとする。

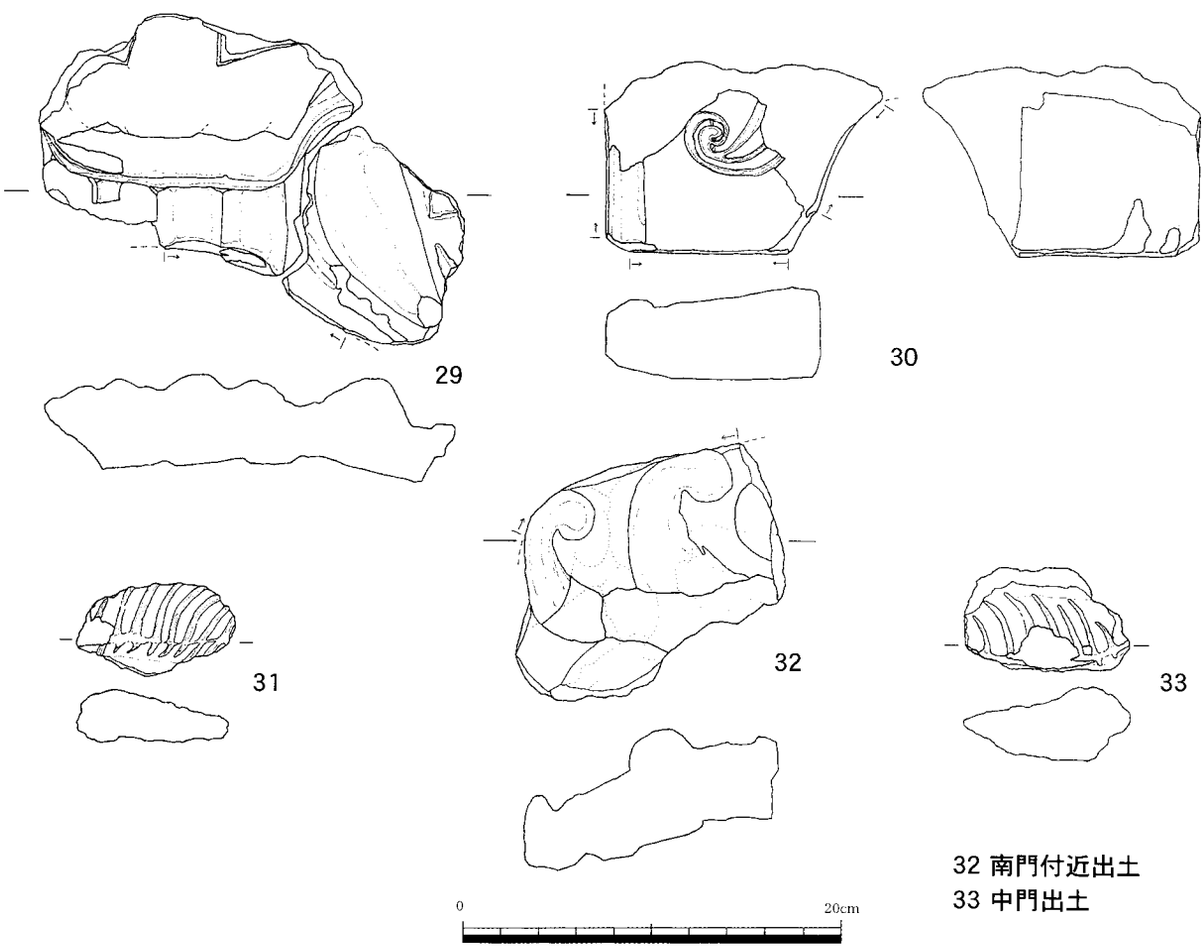



Fig. 10　**南門出土鬼瓦（1：4）**

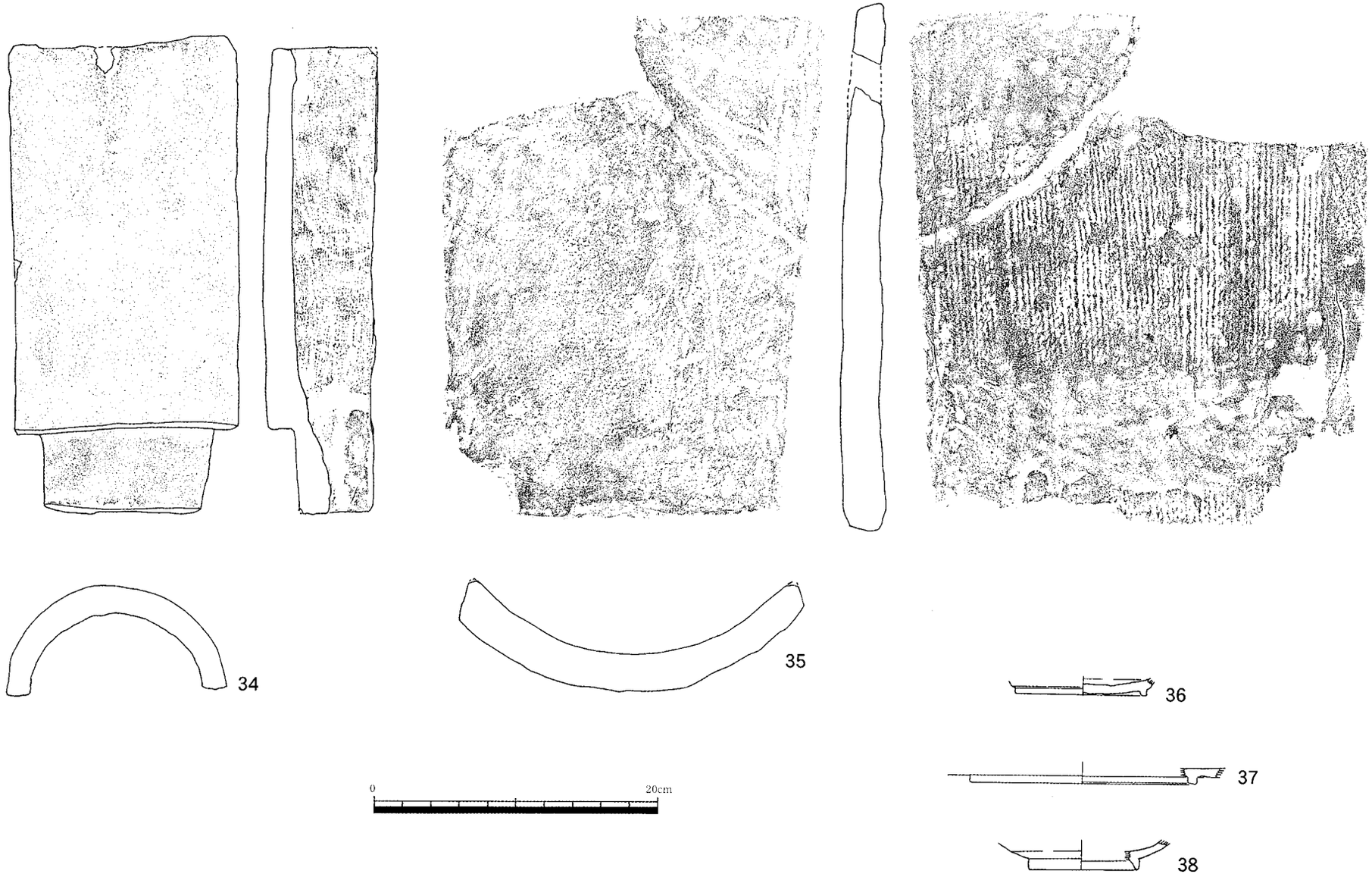



Fig. 11　南門出土平瓦・丸瓦・土器（1：4）

## 2. 塔推定地調査区

これまでの一連の調査において，伊勢国分寺跡の主要伽藍の中心軸は約180m四方とされる伽藍地の西1/3に偏ることが確認されている。よって，東側の広い空閑地に塔が建てられていた可能性が高いと推定されていた。これまでに判明した伽藍配置から，陸奥国分僧寺跡との類似性がみられ，同遺跡では金堂の東側に塔院が設けられているため，そのような可能性が高まった。

伊勢国分寺跡においても「土壇(講堂基壇)より南東約100mの畑地を・・水田に変えようとしたため・・県文化課がこれを調査したところ多数の塼が敷き詰めてあった。」「長さ1mにも及ぶ巨大な石一個が掘り出され」たとされている(註4)。塼が敷き詰められてあったとされる部分は水田化の際にかなり削平を受けており,現状ではほとんど瓦の散布は認められない。しかし，北側の一段高い水田を中心に，比較的瓦の散布が多くみられる。そのため，この部分に塔の一部または塔院回廊が存在するのではないかと期待し「塔推定地調査区」を設定することにした。

調査は，対象地が東西に長い旧水田であるため，南北３m×東西１２mのトレンチを適宜設け，必要に応じて連続または拡張していく方法を取ることにした。しかし，かって水田に造成された際にかなり撹乱されたためか,全面に瓦層が広がり,また新旧の溝が錯綜しているため遺構検出に苦労し，最終的にはほとんどのトレンチを連続していったため800㎡あまりの面的調査の状態となった。

### (1)基本層序

調査区の現況は平坦な水田である。耕作土のにぶい黄褐色土層の下に，床土である褐灰色土層があり上面には鉄分が沈着している。さらに，旧耕作土を整地したとみられる瓦を含む粘質の褐色土層となり，それを除去すると明褐色・明赤褐色の地山が現れる。なお，この褐色土層は全く失われている部分と，ほとんど瓦層と化している部分があり旧畑地の凹凸を均したことによるものとみられる。

### (2)検出遺構（Fig.12・13）

**築地SA0203**　上部構造は全く削平をされて痕跡をとどめていないが，平行する溝SD0209とSD0216及びSD0205によって基底が推定復元される。築地SA0206と東辺築地SA0219の間61.5mを直線的に結ぶとみられる。主軸はおよそN89°10′E～N89°20′Eである。基底部の幅は西よりのSD0209とSD0205間でやや狭く2.3m前後，東よりのSD0216とSD0205間で2.5m前後を測る。北辺溝SD0209とSD0216の間が6.8mほど途切れSA0206とSA0219の中間地点にあたることから門の存在が推定されるが，構造物の痕跡は全く残っていない。

**築地SA0206**(Fig.14)　同様に上部構造は全く削平されているが，平行する溝SD0210とSD0212によって基底が推定復元される。主軸は同様にN0°40′W～N0°50′Wである。調査区北の試掘トレンチNo.10によって北側に連続しているのは確認されるが。南では削平がさらに著しいためか全く検出できない。

**東辺築地SA0219**　伽藍地の範囲を確定するため。調査区を東に延長して検出した。上部構造は全く削平されていて，両側溝SD0217とSD0218によって基底が復元される。幅は約2.7mである。

**掘立柱建物SB0232**　調査区のほぼ中央，北寄りで検出された。SD0209に切られ，先行する遺構である。３間×３間の総柱倉庫で，主軸はN26°Eと東に振っている。南北3.7m，東西3.4mを測り，柱の並びは不均整だが南北4尺，東西3.5尺の柱間が推定できる。柱の掘方は一辺0.6mで不均整な方形である。

**道路状遺構SC0204**　溝SD0205とSD0207の間に位置し，両者の上層溝を両側溝とする。上面は大量の瓦破片と円礫をバラスとして敷き詰めてあった。これと近年の耕地整理に伴う上面の撹乱瓦層の区別が付かずすべて除去したところ，地山面から波板状の痕跡が検出されたため道路であることが判明した。調査区の西から東まで延長約50mにわたって検出した。路面の幅は2.3m前後である。波板状の痕跡は２地区で残存している。圧痕の一単位は，東西0.5m，南北1m，深さ0.1m弱の長楕円の土坑が南北に２つ連続する様な形状で，これが0.6～0.7mの間隔で並列する。掘り込み内の埋土は瓦の細片混じりの砂礫が非常に硬く締まっている。上面のバラスには近世陶器が混じるため，この遺構も近世のものとみられる。

**溝SD0205**　SA0203の南側の側溝にあたる。延長46mを検出した。西端はSD0210と交わっている。道路状遺構SC0204の北側側溝が重複しているため南肩がはっきりしないがおよそ幅2.0m，検出面からの深さ0.5m前後で，断面は逆台形を呈する。上面に，中世以降の幅1m前後の溝が重複しており大量の瓦を含んでいる。本来の埋土

も瓦を含むが量は少ない。

**溝SD0209**(Fig.14) SA0203の北側溝にあたる。延長26mを検出した。西端はSD0210と交わり，SD0210から約5mの範囲は幅が2.2～2.5mと広く。後世の攪乱を受けていない瓦溜まりが残る。幅1.2～1.5mで，検出面からの深さ0.5mで，断面逆台形を呈する。後世の溝SD0208やSD0215に切られているほか，上層に大量の瓦を含むがこれは後世の攪乱層に伴うとみられる。

**溝SD0216** SA0203の北側溝にあたる。北側を後世の溝SD0215が重複する。東側は土坑SK0239やSK0241・SK0242等に切られているため約17mのみを検出した。西端の幅1.2m，検出面からの深さ0.3mとSD0209よりやや浅く，断面は皿状である。Y=51867ラインサブトレンチでは埋土に焼土，炭を多く含み，土師器甕片がまとまって出土した。

**溝SD0201** 調査区の南東隅で3m分を検出した，南北溝。幅は0.9m，深さは0.8mの断面箱状の溝である。埋土は締まりなく極めて新しい。

**溝SD0202** SD0205から南に向かって延びる南北方向の溝。約6mを検出した。幅は1.2m，深さは0.6m程で，断面逆台形を呈する。遺物はほとんど含まない。SD0205上層の溝とSD0207に切られる。

**溝SD0207** 調査区の南辺に沿って緩やかにカーブしながら延びる溝である。延長38m分を検出した。西端調査区外で北に折れSD0214に連続する可能性がある。およそ幅1.0m，検出面からの深さ0.6～0.7mの逆台形の断面を呈する。上層は瓦片を多く含んだSC0204の側溝が重複している。

**溝SD0208** 緩やかなS字状の東西溝。SA0203の基底や溝SD0209・SD0215を切る。幅は最大で0.8m。削平されているためごく浅い皿状の断面を呈し，瓦片を大量に含む。近世溝か。

**溝SD0210**(Fig.14) SA0206の東側溝にあたる南北方向の溝。幅は約1m。SD0209とSD0205と交わり，SD0207およびSK0246には切られる。ちょうど検出面の高さで，瓦や礫が後世の攪乱を受けずにまとまって出土している。

**溝SD0212** SA0206の西側溝にあたる南北方向の溝。西側をSD0214に切られる。幅は最大で1.6m。削平を受けているためかSD0210のような瓦の出土はみられない。

**溝SD0214** SD0212の西側に平行する南北溝。本来の検出面ではSD0212の西半ばを覆うように広がり幅が3m近くあったが，SD0212の肩が検出できるまで掘り下げた。幅は1.6m。調査区南端から2m地点で，東に30°ほど折れる。SD0207に埋土が似ており，連続または合流するものとみられる。

**溝SD0215** 調査区の中央北辺から南下し，SA0203の手前で東に折れ，SA0203に沿うようにうねりながら東に延びる。最大幅は1.6m，狭い部分で0.7mを測る。0.2m程と浅く断面皿状を呈する。瓦は少ない。中世以降の溝か。

**溝SD0244**(Fig.17) SD0205とSD0216を連絡する南北方向の溝。幅は1.3～1.5m。検出面に後世の攪乱を受けない瓦の堆積が確認できる。

**溝SD0217** 東辺築地SA0219の内側溝にあたる南北方向の溝。西側を平行する近世溝が大きく抉っているため幅は不明。検出面からの深さは0.4mを測る。埋土には瓦をわずかに含む。

**溝SD0218** 東辺築地SA0219の外側溝にあたる。遺構明示のコスモスの植栽があり東の肩を出せなかったため幅は不明。検出面に瓦まばらに含む。

**溝SD0211** 調査区南東隅で検出された東西溝。延長12mにわたって検出され，東に向かって広がる。瓦片のほか円礫などを多数含む。締まりがなく，新しい耕作溝か。

**竪穴住居SI0231** 調査区中央南よりで検出された。北辺をSD0205に切られる。東西の一辺約5.6mを測る。方位はN11°Eである。

**竪穴状土坑SI0235** 調査区南東部で同規模の２基が近接して存在する。SI0235は一辺2.3mのやや不整な方形である。主軸はN40°Eと東に振る。

**竪穴状土坑SI0236** SI0235の東側に位置する。南半分は耕作により削平され失われている。東西2.4mで，主軸はN20°Eと東に振る。

**竪穴状土坑SI0245** SB0232の西に隣接する方形の土坑である。北半が調査区外である。SD0215に切られている。主軸はほぼ正方位で，東西規模3.4mを測る。埋土に瓦片を含み，西側で多い。

**竪穴状土坑SI0234** 調査区中央に位置する。南半分をSD0205に切られる。ほぼ正方位で，東西規模約3mである。

**土坑SK0213**(Fig.14) 築地SA0206の基底部にあたる位置で検出された。南北1.4m×東西1.0mの楕円形の土坑である。埋土は密に瓦を含むほか，焼土・炭・土師器・須恵器片を含む。

**土坑SK0233** 調査区中央部の北壁にかかる円形の土坑である。東西は3.6mを測る。瓦片を密に含む。中世以降の瓦廃棄土坑か。

**土坑SK0237**　不整な円形の土坑である。溝SD0202・SD0207を切る。径は2m。埋土は炭を含む。

**土坑SK0238**　不整な円形の土坑である。溝SD0209を切る。径は1.9～2.1m。埋土に瓦の破片を含む。

**土坑SK0239**　東西方向に長い4.5m×2.5mの不整形な土坑である。SD0216を切る。大形の瓦破片が多く,軒瓦も出土している。サブトレンチでは0.2mと浅く,断面は皿状である。

**土坑SK0240**　東西に長い2.5m×1.3mの楕円形の土坑である。SK0239に切られる。瓦はほとんど含まない。

**土坑SK0241**　SD0216を切り,SK0240に切られる。調査区外に広がるため規模は不明。わずかに瓦を含む

**土坑SK0242**　規模の大きな土坑であるが,東側を近世の大溝によって切られるため規模は不明である。瓦を多く含む。

**土坑SK0243**　東西に長い不整形な土坑。南側は調査区外に至る。東西は4.2m。瓦片を大量に含む。新しい瓦廃棄土坑。

**火葬墓SX0246**　SC0204の路盤下から検出された。SD0210を切る。主軸はN26°Eとやや東に振る。南北1.0m，東西0.7mの隅丸長方形の土坑で，東西両辺の中ほどに径0.15mほどの半円形の突出部を持つ。外周はあまり焼けていないが,内部はほとんどが炭・焼土で微細な骨片が混じる。

**(3)出土遺物**

出土遺物は土嚢袋で２００袋以上が出土している。大半が近年に水田化された際の整地層と道路状遺構SC0204のバラスとして用いられたもので,ローリングを受け細片化している。明確な遺構に伴うものは極めて少ない。出土した軒瓦・鬼瓦・文字瓦はすべて図示した。土器類では図示したもののほか古墳時代須恵器片や山茶碗の底部片などが出土しているが細片かつ撹乱層出土のため図化しなかった。

**軒丸瓦**(Fig.18・19)(39・58)はSK0239出土。(41)はSK0142出土。(40・48・50・51・61)はSC0204路盤出土。(42・44・46・49・53)はSD0209上面出土。(54)はSD0211上面出土。(42)はSD0212上面出土。その他は表土または撹乱層の出土である。(40～44)は単弁八葉蓮華文軒丸瓦でⅡA02型式である。(39・48・49)は単弁八葉蓮華文軒丸瓦ⅡA03型式で外縁を有するもの。(47～50)は同じくⅡA03型式の外縁の無いもの。(54)はⅡA03型式に似るがやや異なるもの。(45～46)はⅡA04型式である。(57)は伊勢国府系の重圏文軒丸瓦ＩＡ２型式である。(58～65)は今回新たにまとまって出土し新型式として認定された。(58)から弁が１１葉であることが分かり,単弁十一葉蓮華文軒丸瓦ⅡG01型式とする（註5）。蓮弁が不均等で彫りは極めて浅い。間弁を持たない。外区の珠文は比較的密である。

**軒平瓦**(Fig.20～21)　(69)はSK0239出土。(70・71・78～81)はSC0204路盤出土。(73)はSD0210上面出土。(74)はSK0242出土。(84～87)はSD0209上面出土。(88)はSD0211上面出土。その他は表土及び撹乱層からの出土である。(66)～(72)は均整唐草文ⅡＢ０１型式である。(73・74)は均整唐草文ⅡＢ０４型式である。(75)はまだ型式認定されていないが飛雲文と呼ばれている変形唐草文である。(76)は新たに確認されたもので彫りがシャープで文様が細かい。焼成も須恵質で硬緻。(80)は27次調査で新たに認定されたⅡＢ１３型式である（註6）。(81)以下は伊勢国府系の重廓文軒平瓦である。(81)は重廓文軒平瓦ＩＡ１型式である。(82・83)は重廓文軒平瓦ＩＡ２型式である。(84~89)は重廓文軒平瓦ＩＡ４型式である。(90・91) は重廓文軒平瓦ＩＡ４型式あるいはＩＡ５型式であろう。(92)は重廓文軒平瓦ＩＡ６型式である（註7）。　（藤原）

**鬼瓦**(Fig.19)　いずれも撹乱層からの出土である。(66)は鬼面文鬼瓦の右下破片である。刳り込みの面が一部残る。巻き髭の表現が２単位分みられる。裏面は丁寧にヘラケズリされる。前田分類の伊勢国府Ｉ式である。(67)も伊勢国府Ｉ式の右端であり，外縁の突帯部分と2単位の巻き髭の先端部分が残る。(68)は伊勢国分寺Ｉ式の眼球部分であろう。　（林）

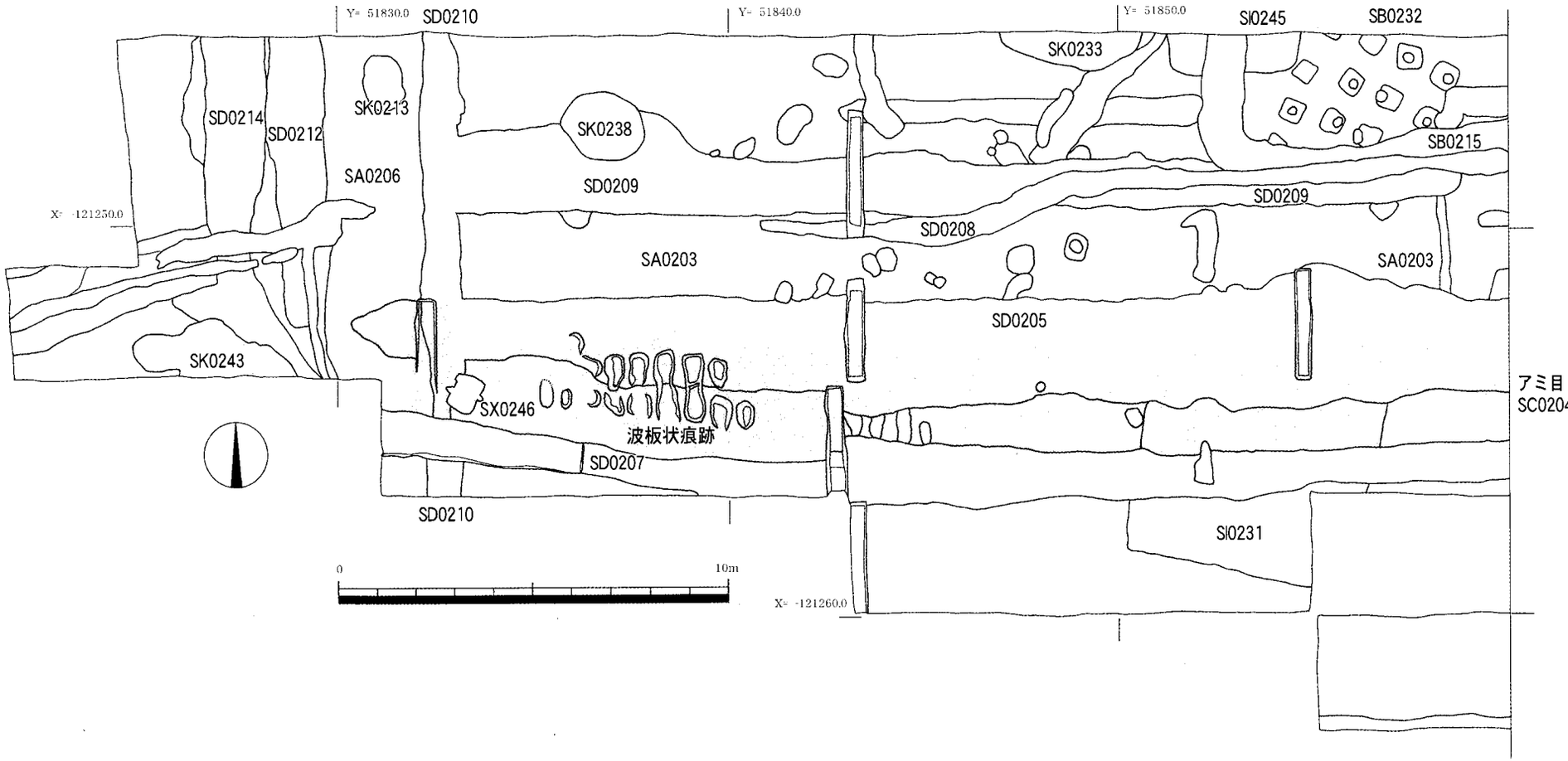
**刻印平瓦**(Fig.22)　(93)はSD0210上面出土。(94・107)はSD0209上面出土。(95・100・103)はSC0204路盤出土。(102)はSD0212上面出土。他は撹乱層出土。すべて凸面に刻印される。(94・95)は「人」，(98・99)は「内」，(100)は「中」か，(102)は「上」，(103)の「宿」のように読めるもののほか,(93)(101)のように同一で刻印ははっきりしているものの読解困難なものも多い。(註7)

**刻印丸瓦**(Fig.23)(108)はSK0239出土。(109)はSD0210上面出土。(110)は撹乱層。(111)はSD0205出土。(112)はSK0242出土。いずれも凸面に刻印される。(108)は「小」と読める。(111)は「中」か。

**平瓦**(Fig.23)(113)はSD0209上面出土。焼成は堅緻。

**丸瓦**(Fig.23)(114)はSD0209上面出土。焼成は甘い。

**須恵器**(Fig.24)(115～117)いずれもSK0213出土。



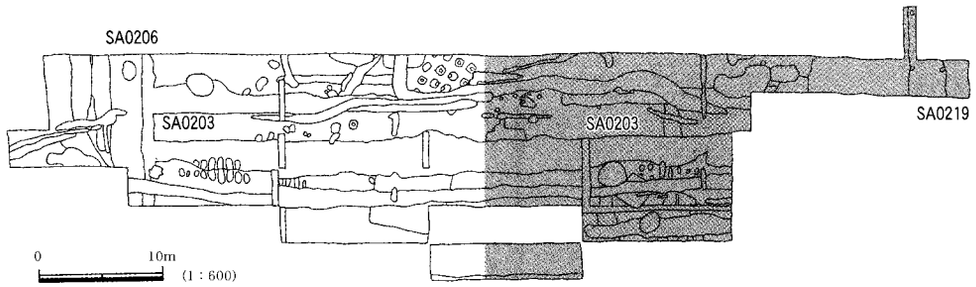




Fig. 12　塔推定地調査区遺構配置図（西半）（1：160）

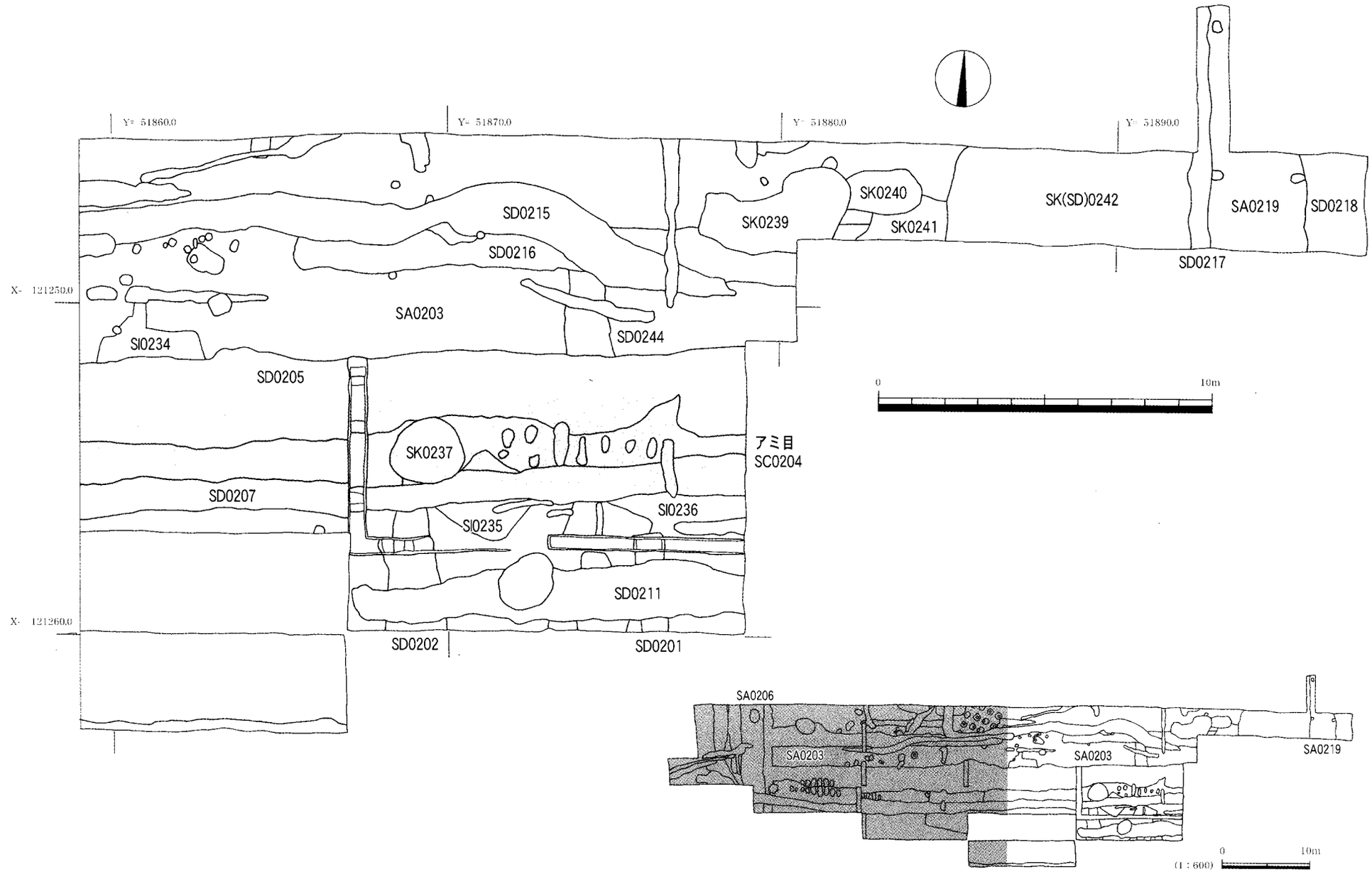



Fig. 13　塔推定地調査区遺構配置図（東半）（1：160）

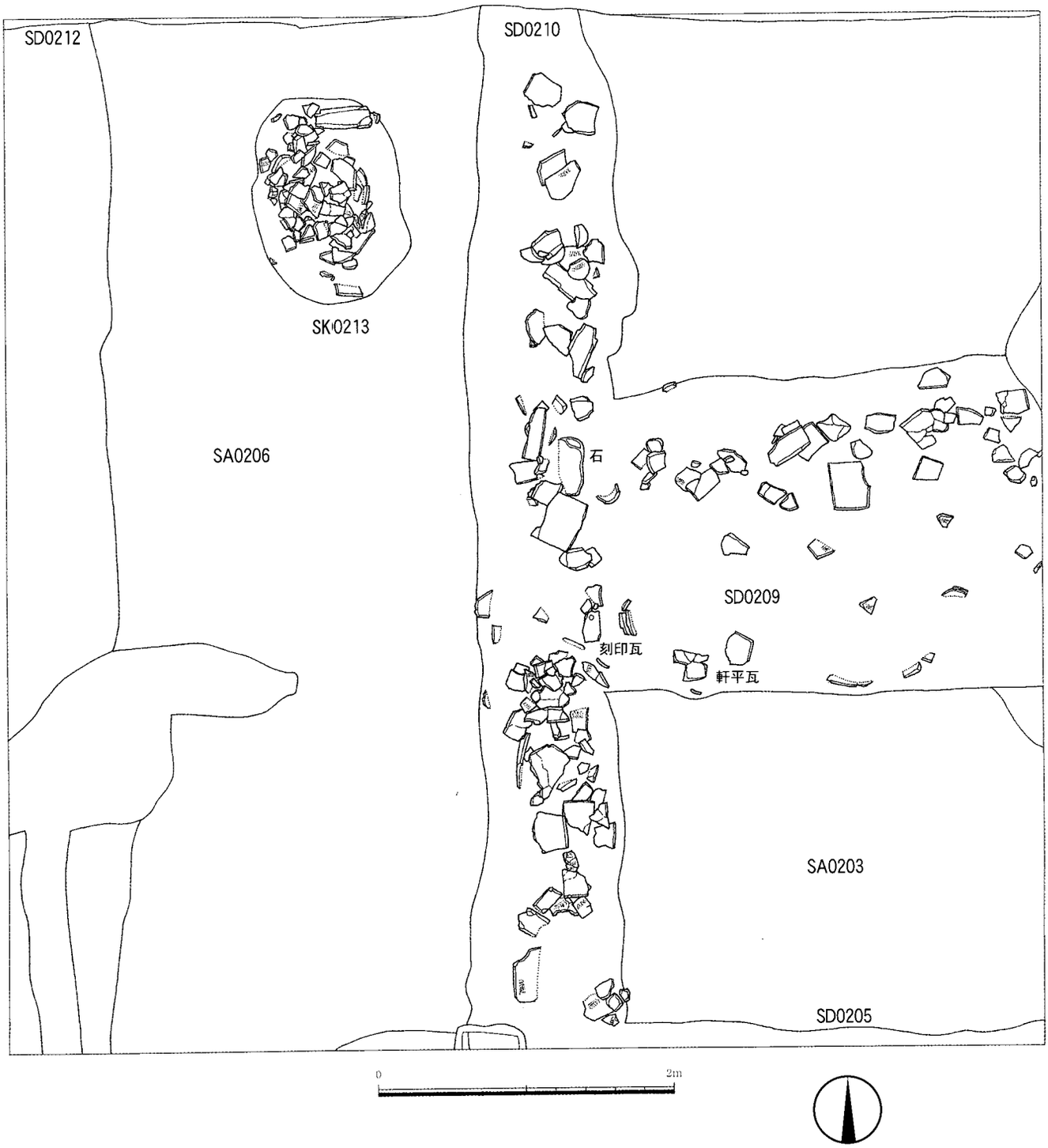
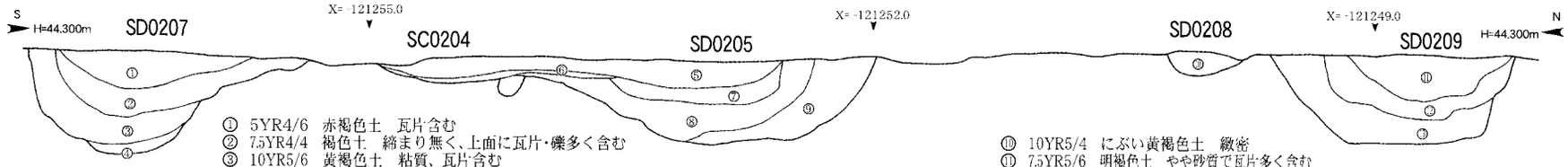



Fig. 14　SD0210・SK0213遺物出土状況（1：40）

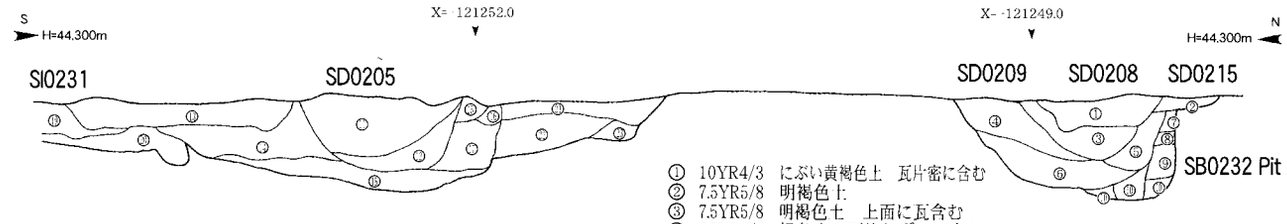
## Y=51843ラインサブトレンチ




① 5YR4/6 赤褐色土 瓦片含む
② 7.5YR4/4 褐色土 締まり無く、上面に瓦片・礫多く含む
③ 10YR5/6 黄褐色土 粘質、瓦片含む
④ 7.5YR5/8 明褐色土
⑤ 10YR6/6 明黄褐色土 細礫含み堅く締まる
⑥ 10YR6/6 明黄褐色土 瓦片と礫多く堅く締まる
⑦ 7.5YR4/4 褐色土 下層との境に瓦片多い
⑧ 7.5YR5/4 にぶい褐色土 瓦片多く含む
⑨ 7.5YR5/8 明褐色土 瓦片を含む
⑩ 10YR5/4 にぶい黄褐色土 緻密
⑪ 7.5YR5/6 明褐色土 やや砂質で瓦片多く含む
⑫ 7.5YR5/8 明褐色土
⑬ 7.5YR5/4 にぶい褐色土
地山 上層 5YR5/8 明赤褐色土
下層 7.5YR5/6 橙色土 堅く締まり青灰色礫含む

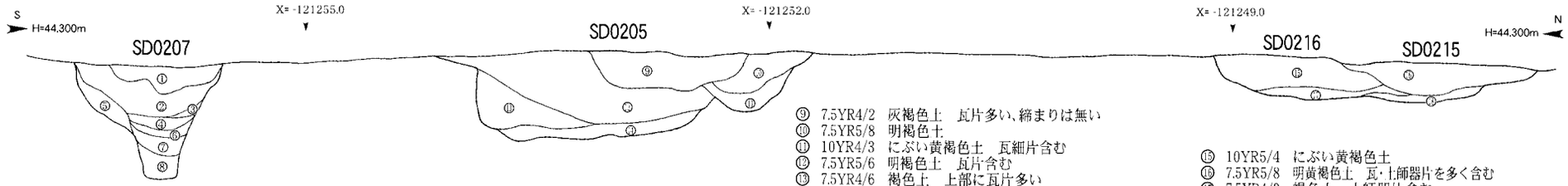
## Y=51855ラインサブトレンチ

⑪ 10YR4/6 褐色土 瓦片多く含む
⑫ 10YR6/6 明黄褐色土
⑬ 7.5YR5/6 明黄褐色土 瓦片多く含む
⑭ 7.5YR5/8 明褐色土 瓦細片わずかに含む
⑮ 7.5YR5/6 明黄褐色土
⑯ 7.5YR4/6 褐色土
⑰ 7.5YR4/4 褐色土 瓦細片多く含む
⑱ 10YR5/8 黄褐色土
⑲ 7.5YR5/6 明褐色土
⑳ 10YR5/6 黄褐色土
地山 7.5YR5/8 明褐色土




① 10YR4/3 にぶい黄褐色土 瓦片密に含む
② 7.5YR5/8 明褐色土
③ 7.5YR5/8 明褐色土 上面に瓦含む
④ 7.5YR4/4 褐色土 瓦片わずかに含む
⑤ 10YR5/8 黄褐色土 瓦片含む
⑥ 7.5YR4/6 褐色土 粘質
⑦ 7.5YR4/2 灰褐色土
⑧ 7.5YR4/6 明褐色土
⑨ 7.5YR4/3 褐色土 粘質
⑩ 7.5YR4/3 褐色土

## Y=51867ラインサブトレンチ




⑨ 7.5YR4/2 灰褐色土 瓦片多い、締まりは無い
⑩ 7.5YR5/8 明褐色土
⑪ 10YR4/3 にぶい黄褐色土 瓦細片含む
⑫ 7.5YR5/6 明褐色土 瓦片含む
⑬ 7.5YR4/6 褐色土 上部に瓦片多い
⑭ 10YR5/3 にぶい褐色土

⑮ 10YR5/4 にぶい黄褐色土
⑯ 7.5YR5/8 明黄褐色土 瓦・土師器片を多く含む
⑰ 7.5YR4/3 褐色土 土師器片含む
⑱ 10YR4/3 にぶい黄褐色土 砂礫多く含む

① 7.5YR4/6 明褐色土
② 10YR4/3 にぶい黄褐色土、締まりは無い
③ 10YR5/6 黄褐色土
④ 10YR4/4 褐色土
⑤ 7.5YR5/6 明褐色土
⑥ 10YR5/6 黄褐色土
⑦ 7.5YR5/6 明褐色土
⑧ 10YR5/4 にぶい黄褐色土

0 2m

Fig. 15 **塔推定地調査区セクション図（1）（1：40）**

Y=51879ラインセクション

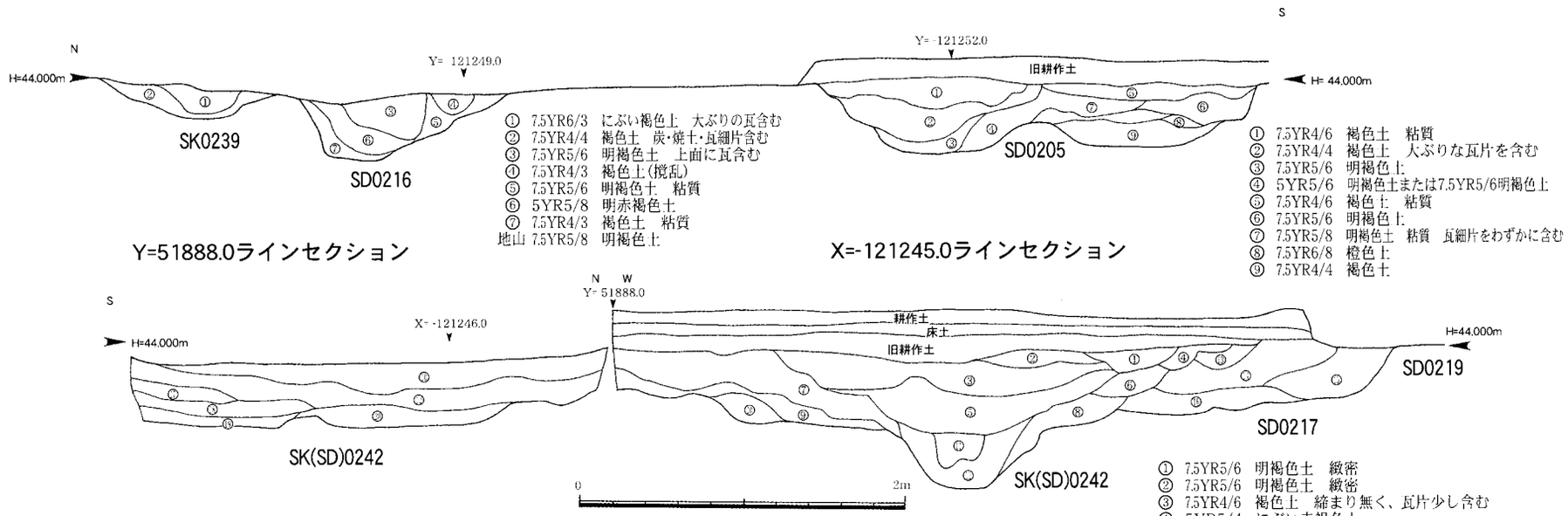
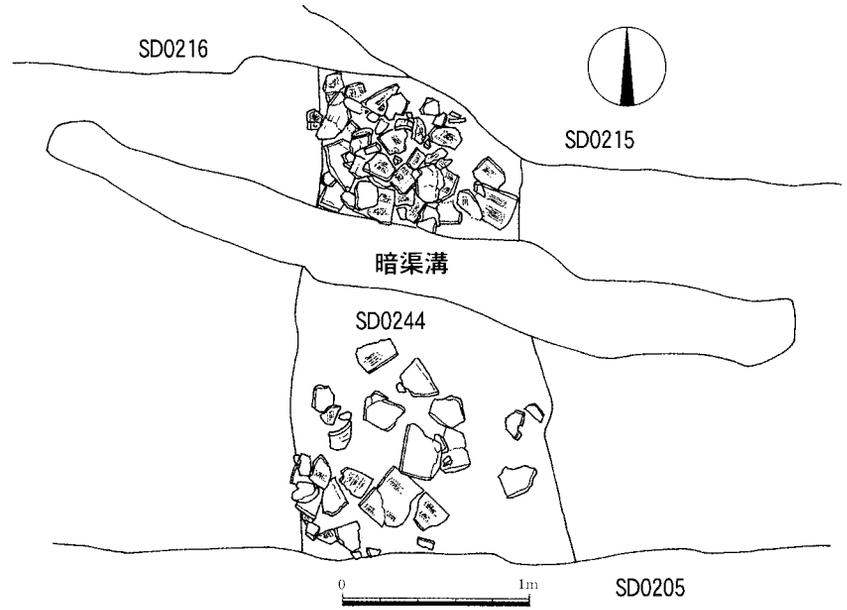



Fig. 16 塔推定地調査区セクション図（2）（1：40）




① 7.5YR5/6 明褐色土 緻密
② 7.5YR5/6 明褐色土 緻密
③ 7.5YR4/6 褐色土 締まり無く、瓦片少し含む
④ 5YR5/4 にぶい赤褐色土
⑤ 7.5YR4/3 褐色土 締まり無く、瓦片・礫を極めて多く含む
⑥ 7.5YR5/6 明褐色土 やや砂質
⑦ 10YR4/3 にぶい黄褐色土 礫含む
⑧ 7.5YR5/4 にぶい黄褐色土
⑨ 7.5YR5/6 明褐色土 緻密、瓦片含む
⑩ 7.5YR4/3 褐色土 粘質
⑪ 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘質、瓦片多く含む
⑫ 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘質
⑬ 7.5YR4/4 褐色土 瓦細片多く含む
⑭ 5YR4/8 赤褐色土 瓦細片含む
⑮ 7.5YR4/6 褐色土 瓦細片含む
⑯ 7.5YR5/6 明褐色土
⑰ 10YR5/8 黄褐色土
⑱ 10YR5/8 黄褐色土
⑲ 10YR4/6 褐色土 瓦片を含む
⑳ 7.5YR5/6 明褐色土粘質
地山 5YR5/8 明赤褐色土

Fig. 17 SD0244 遺物出土状況（1：40）

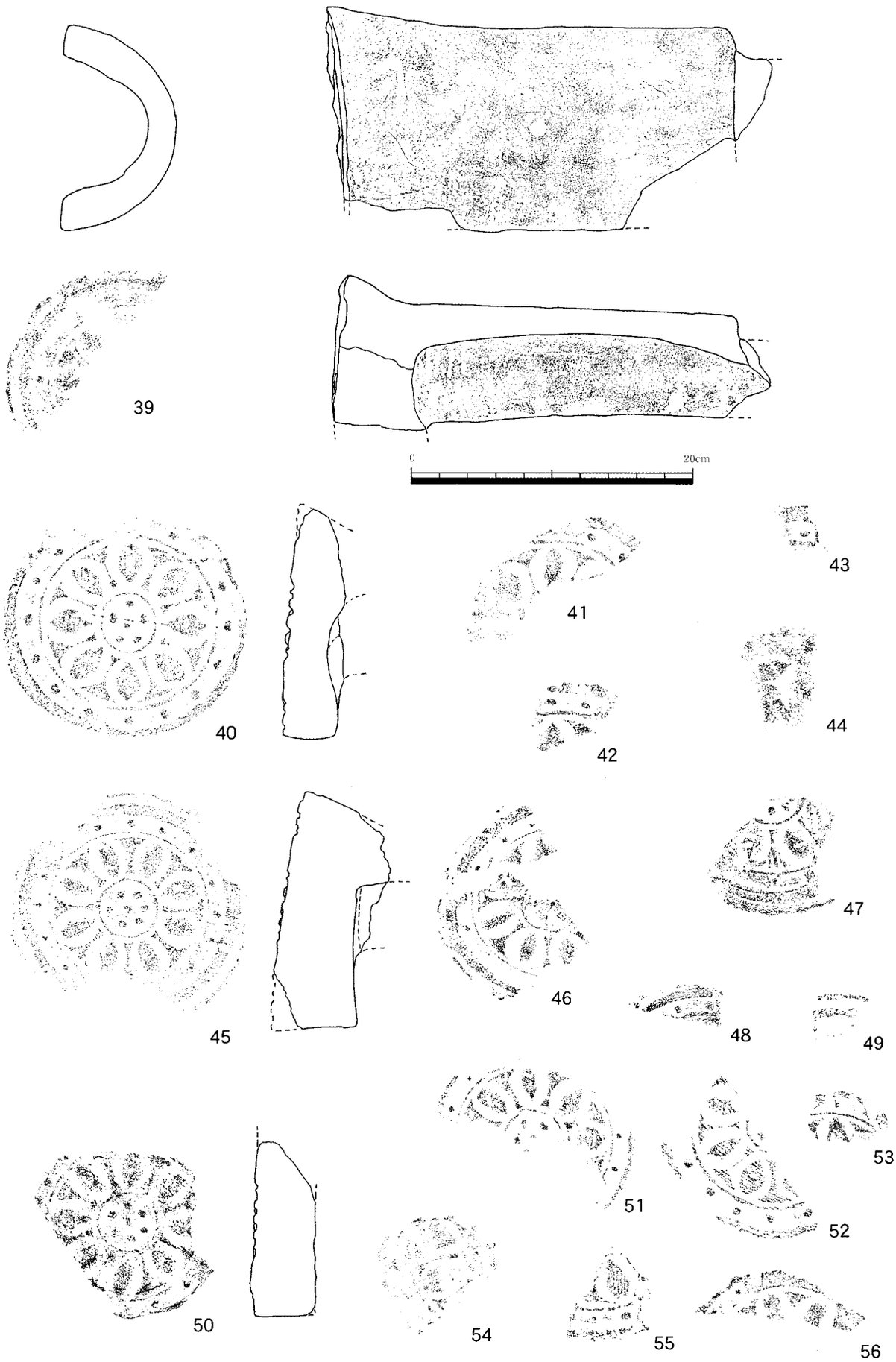



Fig. 18　塔推定地調査区出土軒丸瓦(1)（1：4）

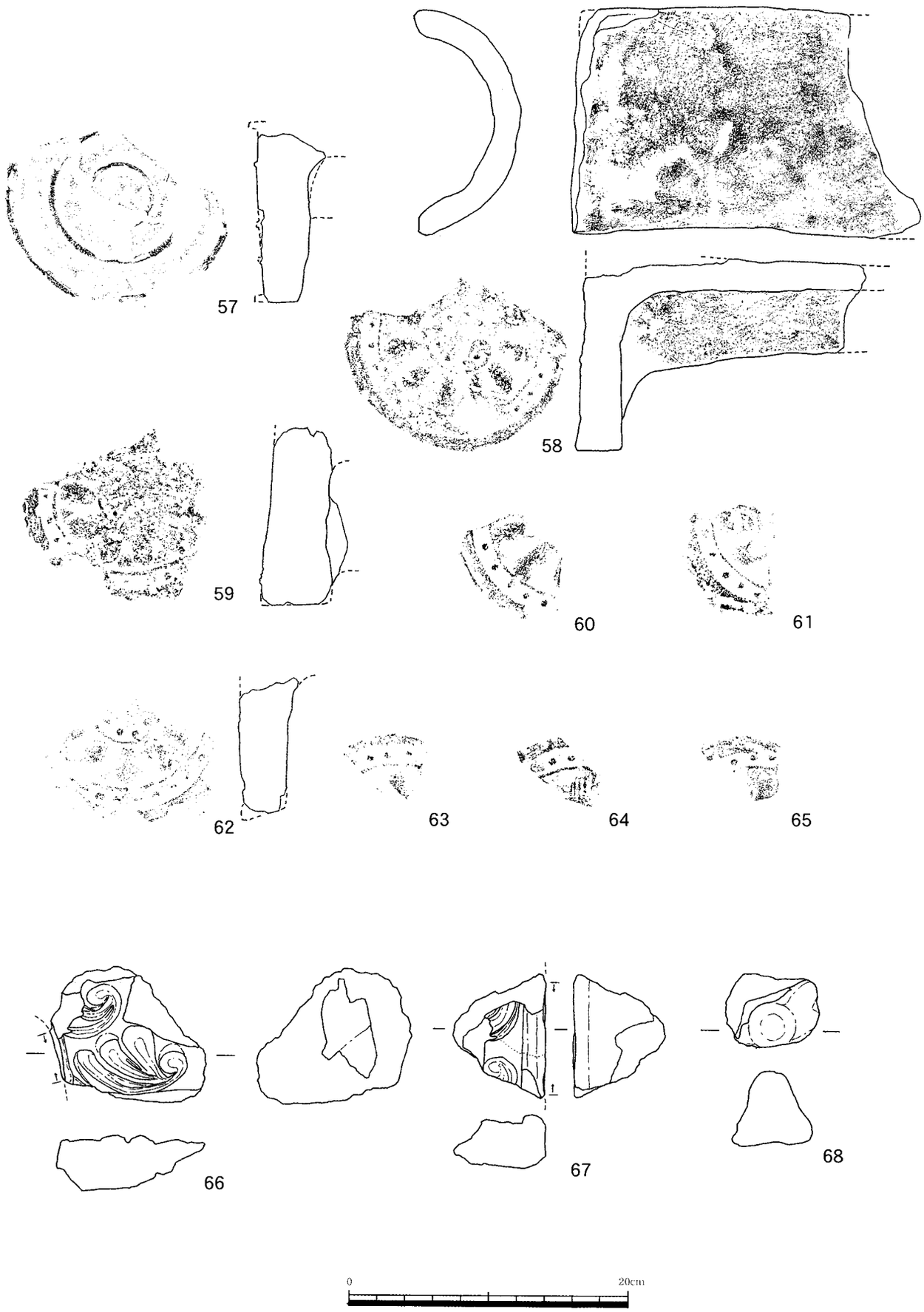



Fig. 19　塔推定地調査区出土軒丸瓦(2)・鬼瓦（1：4）

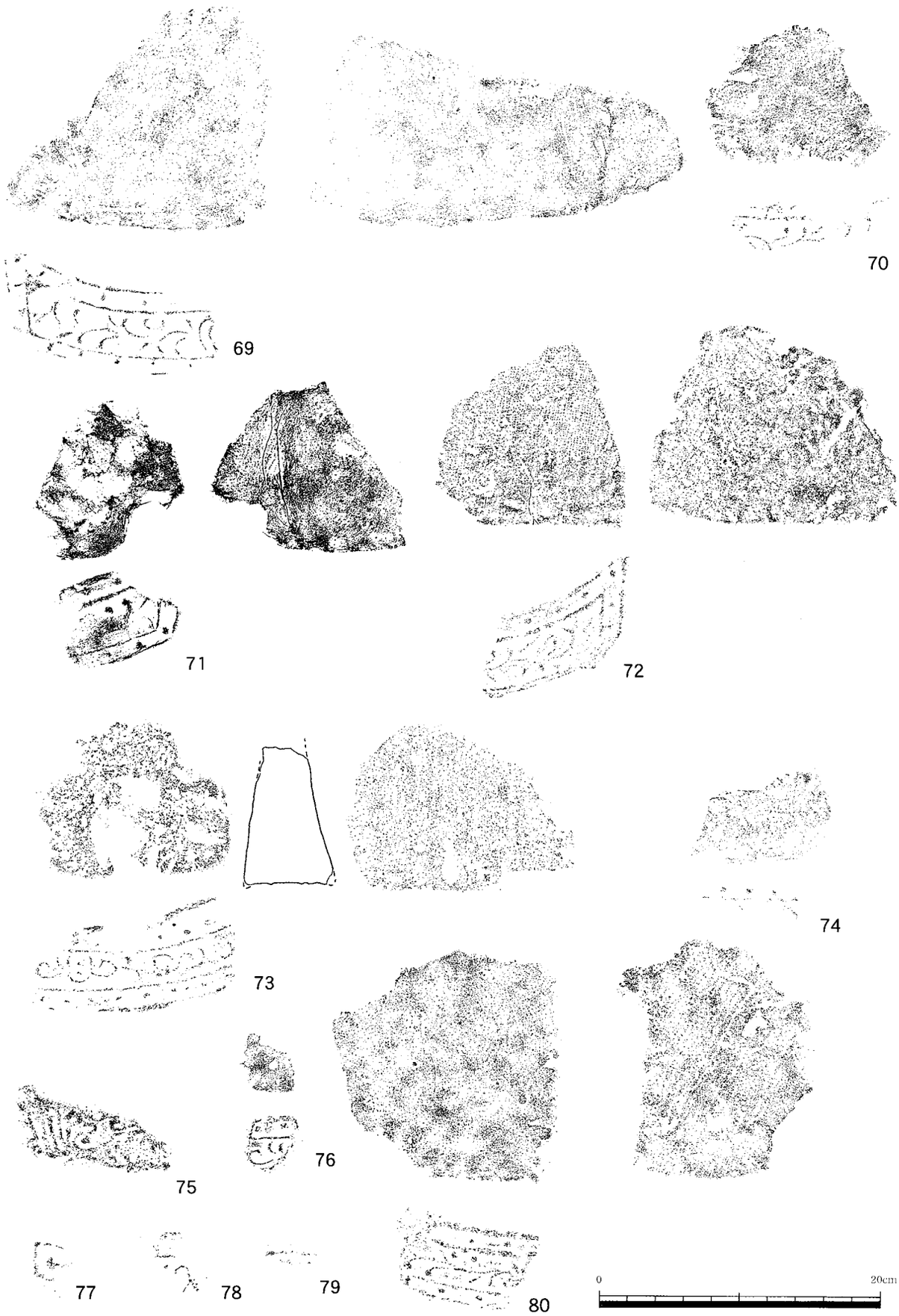



Fig. 20　塔推定地調査区出土軒平瓦(1)（1：4）

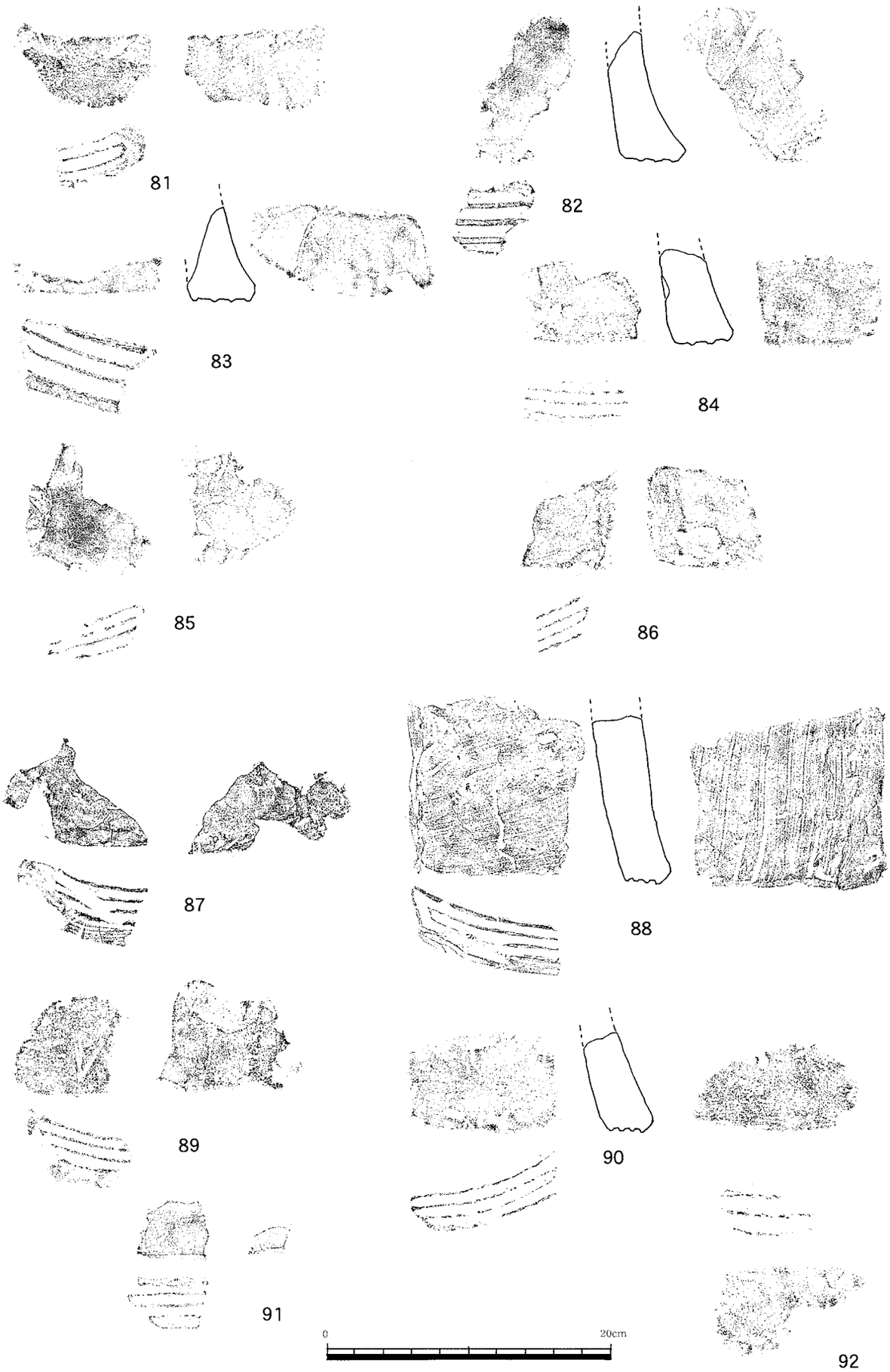



Fig. 21　塔推定地調査区出土軒平瓦(2)（1：4）

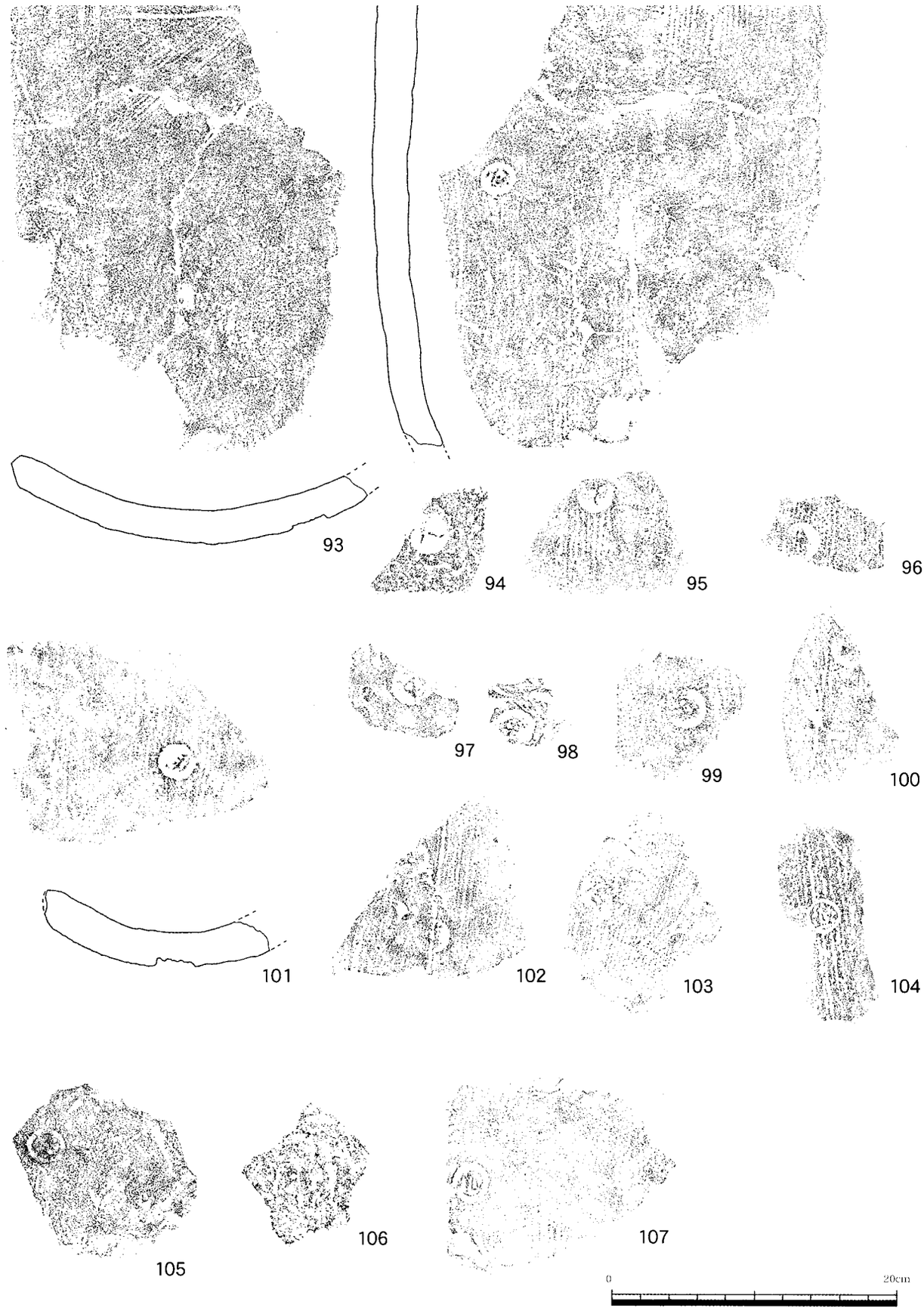



Fig. 22　塔推定地調査区出土刻印平瓦（1：4）

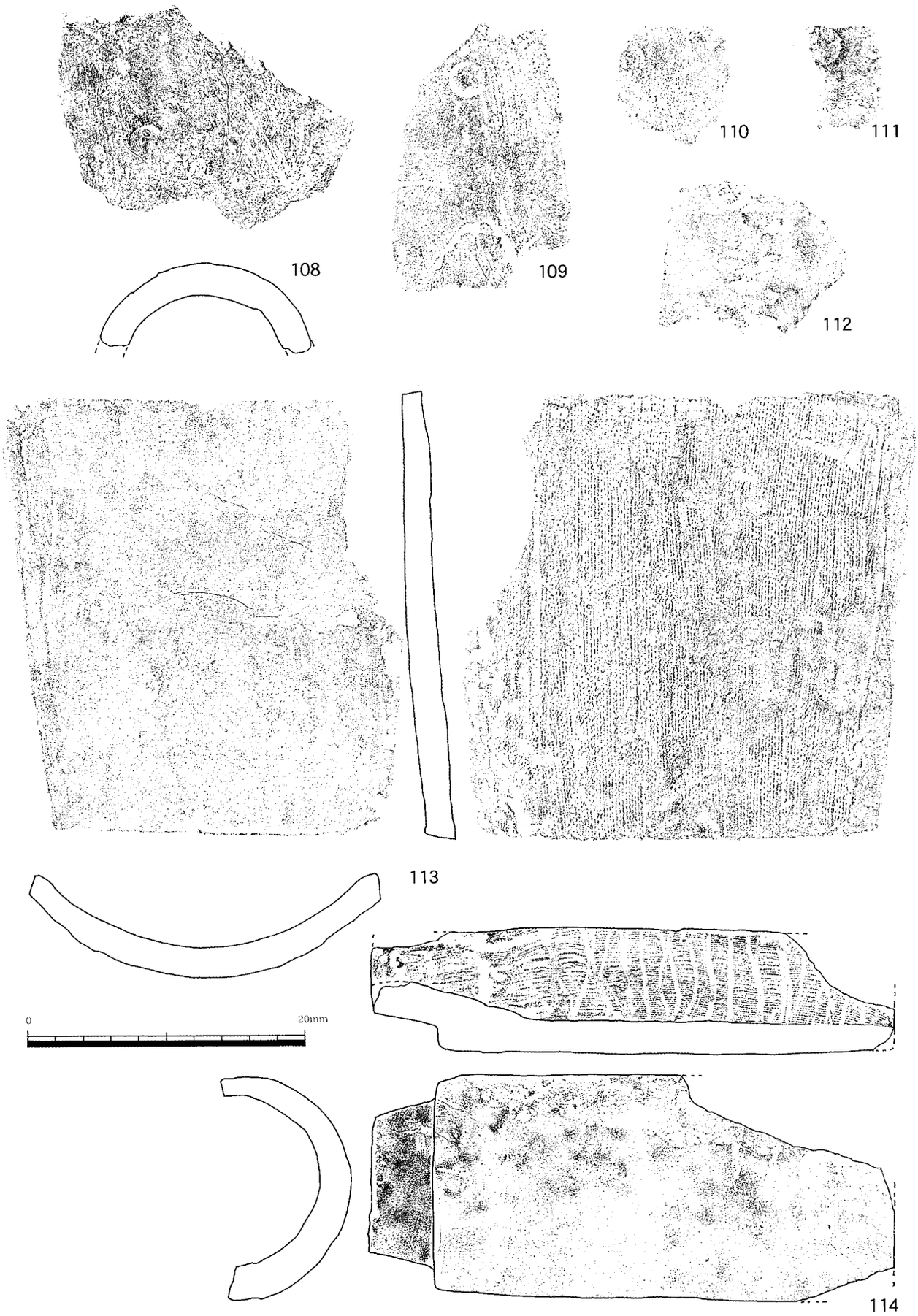



Fig.23　塔推定地調査区出土刻印丸瓦・平瓦・丸瓦　(1:4)

(115)は坏蓋で口径13.8cm。宝珠つまみを持ち，平らな天井部から体部が直線的に開き,口縁部が大きく屈曲した後垂下する。(116・117)も口縁部はいったん水平に屈曲した後垂下する。(121)はSD0209上面出土。丸みを持つ天井部から，内側に折れ曲がるよう口縁が垂下する。

**土師器**(Fig.24)(118～120)はSK0213出土。(118・119)は坏で，口縁部が内湾気味に立ち上がり,端部は内傾する面をなす。(120)は坏で，直線的に口縁部が立ち上がり，端部は強く横ナデされる。(124～127)はSD0216出土。(124)は甕で，口径15.3cm，器高9.1cm。ゆがみが強い。(125)は坏で,口縁部にかけてわずかに内湾しながら立ち上がる。(126・127)は甕の口縁部である。

**灰釉陶器**(Fig.24)(122･123)はSD0209上面出土。(122)は碗で,丸みを持つ体部に，高くやや外に開く高台が付く。(123)は皿で,いわゆる三日月高台が付く。

(藤原)

(註4) 仲見秀雄ほか1980『鈴鹿市史』第1巻　鈴鹿市教育委員会

(註5) 新田剛2002『伊勢国分寺跡1』鈴鹿市教育委員会の分類を準用して十一葉に「G」を当てる。

(註6) 中森成行・藤原秀樹2003「国分西遺跡(国分寺27次)」『鈴鹿市考古博物館年報』第4号 鈴鹿市教育委員会

(註7) 伊勢国府跡軒瓦の分類は，新田剛1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会による。

(註8) 伊勢国府跡及び国分寺跡の瓦刻印の分類はまだ確立しておらず，今後の課題である。

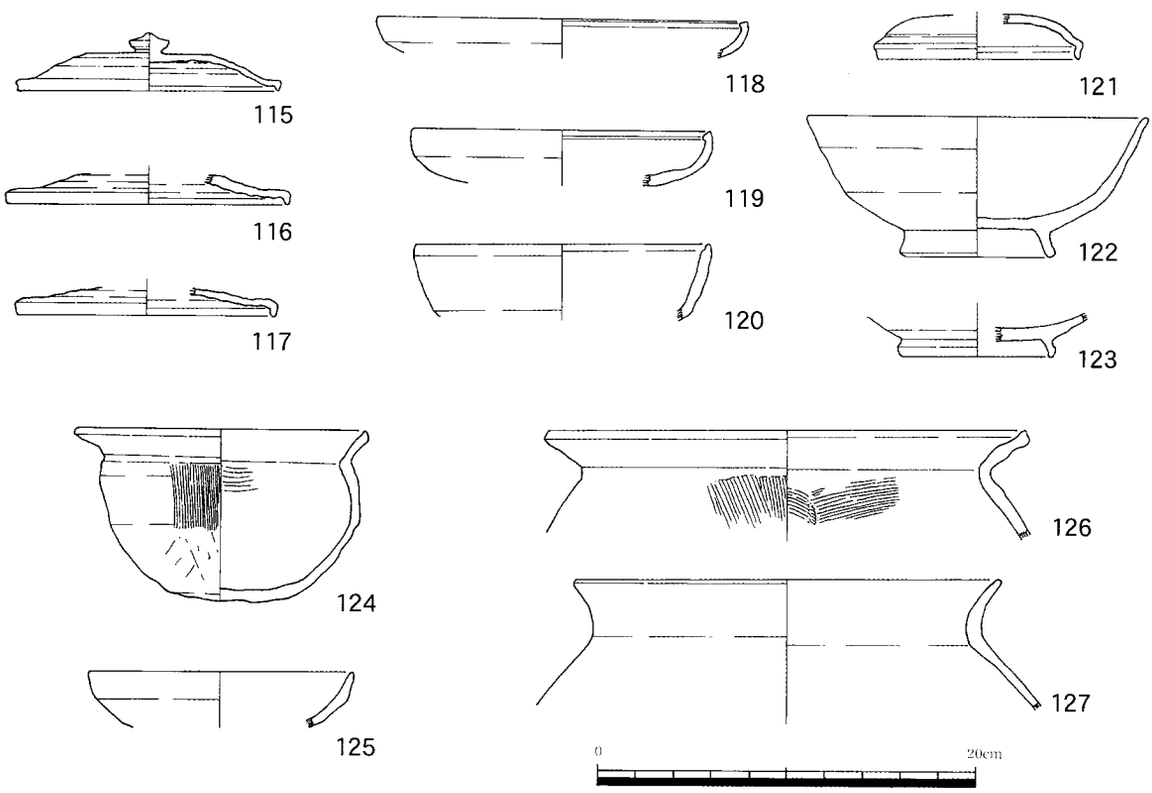



Fig.24　**塔推定地調査区出土　土器　(1:4)**

### 3．トレンチ調査

塔推定地調査区に塔基壇が無いことが明らかになった段階で,新たに基壇の有無を確認するためのトレンチ調査を広い範囲で実施することとした。

まず，塔推定地調査区で検出された築地SA0203・SA0206と南辺および東辺築地で区画される院の中央に塔がある可能性を考え，Y=51843・51855・51867の12m間隔で幅2mの南北トレンチを入れ，No.1～3トレンチとしたが，十分な手ごたえは得られなかった。

そのため，回廊西のY=51735ラインの南北方向に幅2m，延長80mのNo.4トレンチを設定した。また回廊東のY=51831ラインに幅1mの南北トレンチNo.5を，No.5の南端X=-121335地点から回廊南東部にかけて東西トレンチNo.6を，No.1トレンチX=-121299地点から回廊に向けて東西トレンチNo.7を，No.3トレンチ末端のY=-121323地点から東辺築地に向かい東西トレンチNo.8を入れた。トレンチNo.8において運良く大型の掘立柱建物の柱穴列が検出されたため，南東隅調査区として拡張調査することとなった。

さらに，塔推定調査区の北側でも遺構の状況を確認するためY=51855ラインに幅2mの南北方向のNo.9トレンチと,No.9トレンチから金堂に向かいX=-121223ラインに東西方向の幅1mのNo.10トレンチを設定した。

#### (1)検出遺構

トレンチ調査のため，ここではある程度性格が明確なものと,他調査区との関連が認められるもののみを取り上げた。

**掘立柱建物SB0280**　No.4トレンチ北端のX=-121260地点付近で検出した。主軸はN39°Eとかなり振る。2間×2間以上で柱間は北東辺が約1.2m(4尺)，南東辺が約1.35(4.5尺)とみられる。掘り方は一辺0.6mの方形。

**竪穴住居SI0281**　No.5トレンチのX=-121316～-121319地点で検出した。主軸はほぼ正方位。南北3.9mを測る。埋土に焼土・炭・土師器片を多く含む。

**竪穴住居SI0282**

No.10トレンチのY=51830～51835地点の南壁で北辺と北東隅のみを検出した。主軸はN5°Wと振る。東西4.3m以上。埋土にわずかに炭を含む。

**土坑SK0283**　No.3トレンチのY=-121276～277地点で検出した。0.8m×1.65mの隅丸長方形の土坑で,主軸はN11°W。

**土坑SK0284**　No.1トレンチX=-121300地点で検出した。0.85m×1.65mの隅丸長方形の土坑で,主軸はN37°E。

**土坑SK0285**　No.1トレンチX=-121309地点で検出。25次のP・Q-1トレンチですでに検出済み。0.7m×1.1mの楕円形の土坑で，主軸はN53°W。焼土・炭を含む。

**土坑SK0286**　No.7トレンチ0.5m×0.8mのやや不整な長方形の土坑で，主軸はN9°E。焼土・炭を多く含み周囲も焼ける。火葬坑か。

**土坑SK0287**　No.4トレンチのX=-121304～121308地点で検出した。南北3.5mの隅丸方形の土坑で瓦を密に含む。SK0288を切る。

**土坑SK0288**　No.4トレンチのX=-121299～-121304地点で検出した。南北6m以上の大規模な土坑でSK0287ほどではないが瓦を多く含む。

**溝SD0289**　No.2トレンチのY=-121270地点から，No.1トレンチのY=-121278地点へと続いている。幅約1.8m，走行はN63°Eである。

**溝SD0290**　No.3トレンチX=-121278付近で検出。ほぼ東西に走る。幅0.75m。瓦を多く含む。

**溝SD0291**　No.3トレンチX=-121282付近で検出。幅約0.5mの溝が2条重複しており，北側のものが新しい。N81°Wとやや振る。瓦を多く含む。

**溝SD0292**　No.1トレンチ X=-121279地点で検出された。幅約0.5m，N86°Eとやや振れる。やや瓦を含みSD0290に連続するか。

**溝SD0293**　No.1トレンチX=-121282～-121284地点で検出された，ほぼ東西方向の溝でNo.5トレンチに連続する。No.1トレンチのSD0291にも連続するか。

**溝SD0294**　No.3トレンチX=-121294地点からX=-121301地点で検出された幅1.3mの溝である。振れはN26°Eである。

**溝SD0295**　No.3トレンチX=-121301地点からX=-121310地点にかけて検出された幅3mの溝である。振れはN37°Wである。南東隅調査区のSD0228・SD0229に連続すると見られる。近世溝である。

**溝SD0296**　No.1トレンチX=-121293地点から，約20°Eの振れで約5m伸び，X=-121299地点で90°東に折れる。削平されて断続的ではあるが，幅約0.3mで埋土は灰褐色。竪穴住居の壁溝か。

**溝SD0297**　No.6トレンチY=51842地点で，幅約1m

で検出され，No.1トレンチのX=-121307地点からX=-121317.5地点にかけて検出される。No.1トレンチでの幅は1.6m，振れはN24°Wである。埋土に須恵器・瓦片を多く含む。25次調査P・Q-1区でトレンチを幅2.1mで横断したため竪穴住居SI0130と報告したが（註9）訂正する。

**溝SD0298**　No.4トレンチX=-121309地点で検出された。約N60°Wに振れる幅0.2～0.3mの溝で，痕跡的であるが焼土，炭，土師器，須恵器細片を含む。竪穴住居の壁溝か。

**溝SD0299**　No.4トレンチX=-121260地点で検出された。SB0280を切る。振れは約N50°Wで，西に向かい広がる。瓦を多く含むが，近世溝か。

**溝SD02100**　No.10トレンチY=51832地点で検出された。SB0282を切る。幅1.6mの南北方向の溝。瓦を多く含む。塔推定地調査区SD0210の延長か。

**溝SD02101**　No.10トレンチ　Y=51829～51830地点で検出された。幅1.8mの南北溝。瓦を多く含み，同じくSD0212の延長か。

**溝SD02102**　SD02101の西側に平行して検出された南北溝。SD02101を切る。幅1.7～2.0m。同じくSD0214の延長か。　（藤原）

（註9）藤原秀樹・林和範2002『伊勢国分寺跡２』鈴鹿市教育委員会

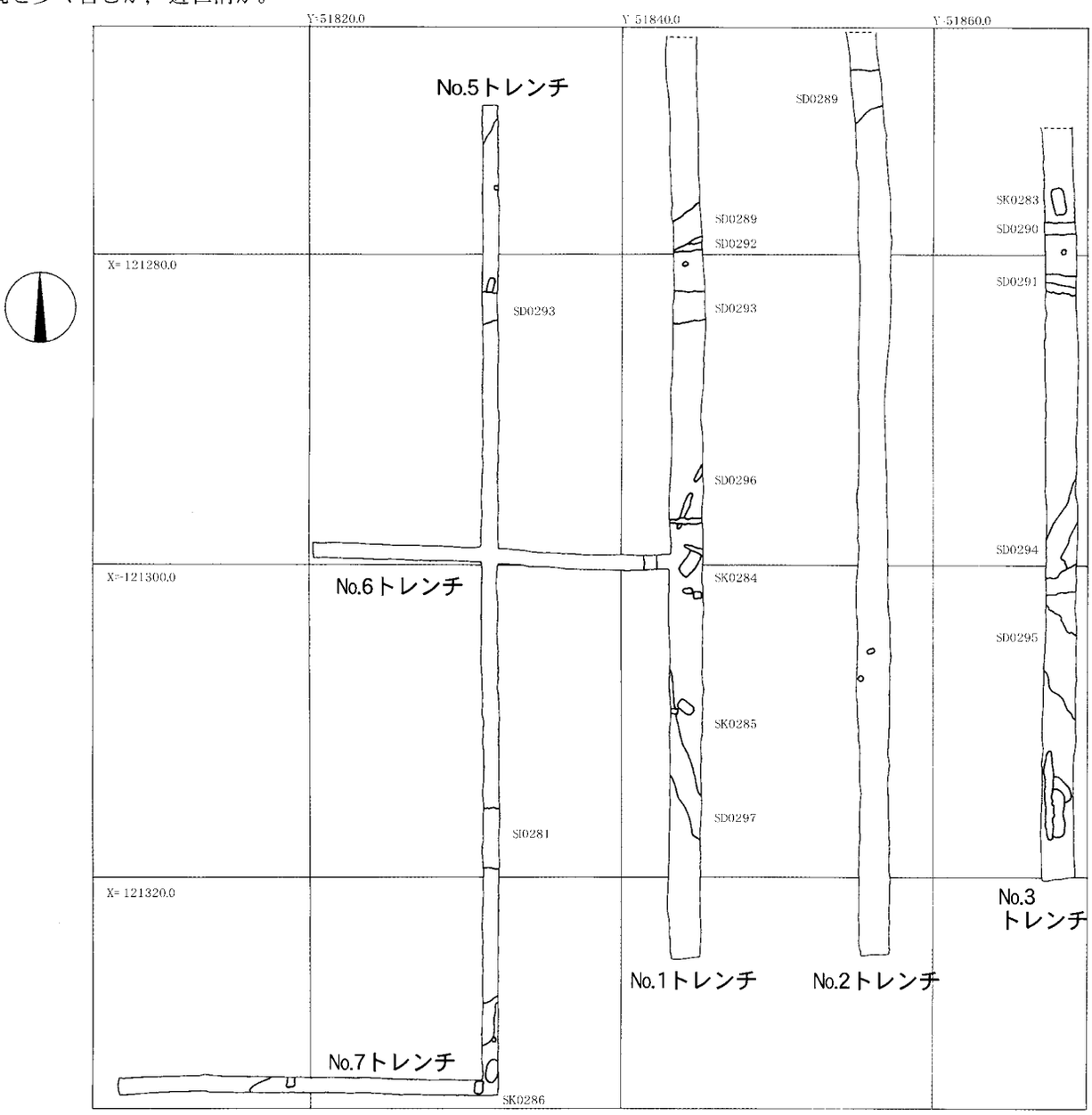



Fig.25　回廊東部トレンチ　(1:400)

0　20m

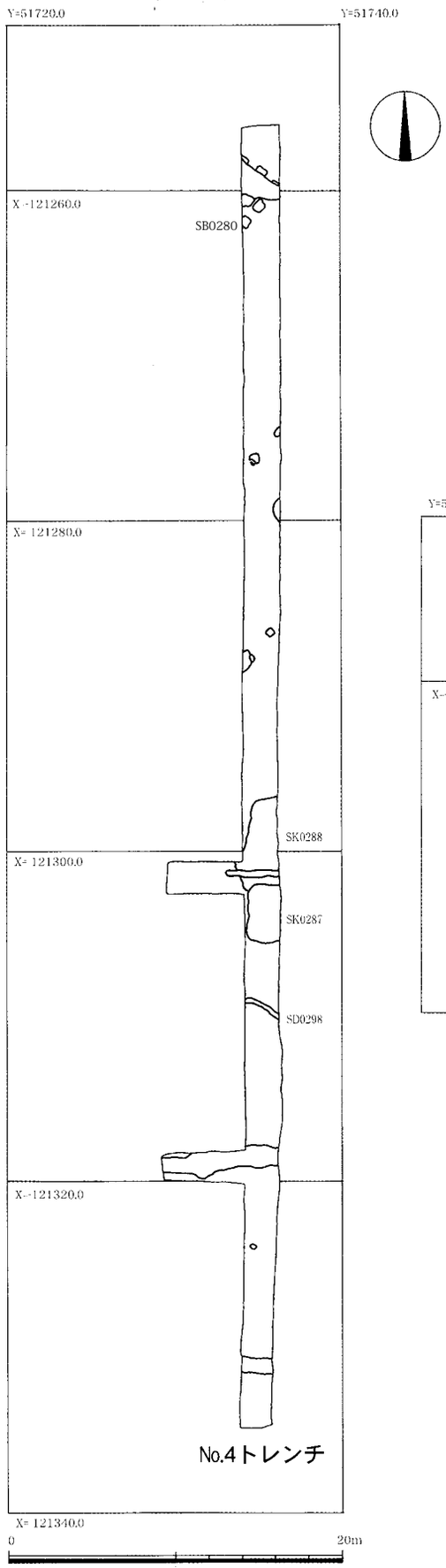



Fig.26　回廊西部トレンチ　(1:400)

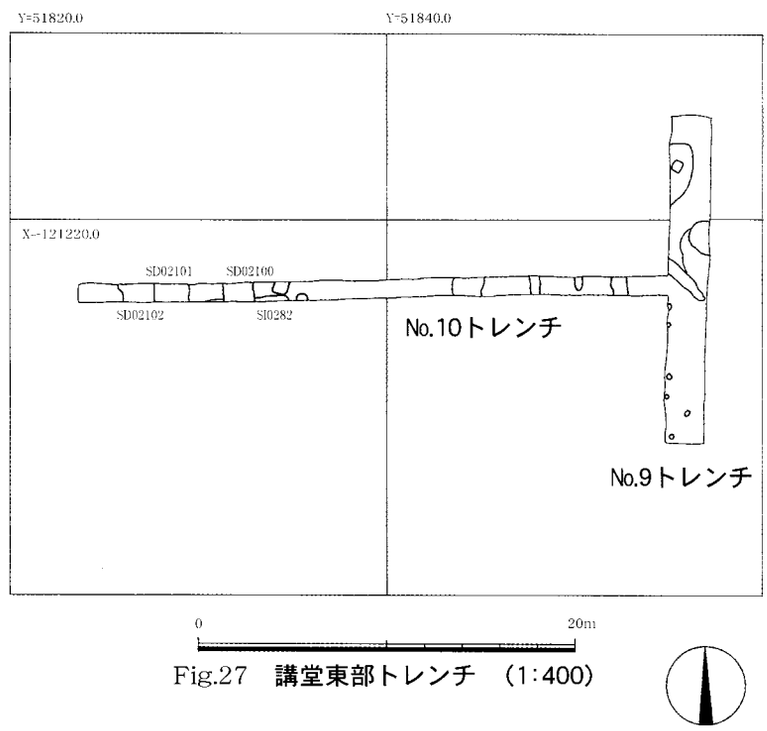



Fig.27　講堂東部トレンチ　(1:400)

## 4. 南東隅調査区

塔確認を目的とした回廊東のNo.8東西トレンチの一部に，一辺1mの大形柱穴の列を検出したため調査区を面的に拡げ南東隅調査区とした。

さらに調査区の一部をトレンチ状に伸ばして東辺及び南辺築地の検出を試みた。東辺築地は基底部を良好に検出できたが,南辺築地については南を供用中の農道が通っており延長できなかったことと,農道側溝と見られる撹乱も著しく，基底部幅を明らかにするには至らなかった。

主な遺構として掘立柱建物・築地に伴う溝を検出した。瓦類のほかは，山茶碗・近世陶器がごく少量出土したのみである。

### (1) 基本層序

表土は極めて薄く，約0.2～0.3mの褐灰色の耕作土を除去すると直ちに橙色土の地山となる。

### (2)検出遺構(Fig.28)

**掘立柱建物建物SB0220** (Fig.28・29)

築地内の南東隅で検出された梁行2間×桁行5間の身舎に南面庇を伴う東西棟である。柱間は2.82～3.16mに収まり10尺等間，庇の出は3.17～3.28mで収まり11尺で把握できる。

柱穴堀方の規模は一辺1.0～1.2mの整った方形，もしくは隅丸方形を呈し，庇の柱列では0.7～1.0mと若干規模が小さい。

殆どの柱穴から柱痕跡が検出され，抜取痕が見られるものもある。重複して柱穴が検出されるものもあり，一部の柱が差し替えられた状況を示しているとも考えられるが，柱穴の埋土の状況に由来するものの可能性が高い。柱穴掘方の埋土に土器・瓦はみられないが，抜取痕には瓦が含まれている。

建物東辺から築地芯々まで約9.5m，南辺からは約10mの距離を置き，築地に方向を揃えて建てられほぼ正方位を向く。建物の各辺の方位は身舎北辺でN1°3' W，南辺（庇列）でN1°28' W，東辺でN1°31' W，西辺でN0°15' Wとなる。N1°36～48' Wとされている国分寺の中心伽藍の方位と比較すると，築地に面する辺が近い値をとる。

これまで検出された国分寺造営以前と考えられる掘立柱建物が東に振る傾向があることからも，SB0220が国分寺造営基準軸の規制を受け，造営時またはそれ以降に建てられたことは明らかである。

**築地南辺内溝SD0221**　調査区南部の西・東２箇所で検出された。断面での観察によると遺構が重複し，溝南肩は残っているものの北側は中世以降に掘削された溝によって数度にわたり撹乱を受けている。推定幅1.5～2.0m，検出面からの深さは0.4～0.5mを測る。上層から中層にかけて瓦を多く含み，下層には瓦を含まない。

**築地南辺SA0222**　上部構造は削平によって痕跡をとどめていないが築地内溝のラインによって確認される。溝築地南辺外溝が検出されていないため，この地点での規模は不明である。

**築地東辺内溝SD0223**　後世の溝により溝西肩が壊されているため正確にはわからないが，推定幅2.5m，検出面からの深さ0.55mを測る。瓦片は上・中層にかけて多く，下層では全く見られない。

**築地東辺SA0224(0219)**　上部構造は既に削平されており，築地そのものの痕跡は残っていないが，築地に伴う内・外溝の検出によって幅約３m基底部のみが確認された。

**築地東辺外溝SD0225**　溝西肩ラインを確認したのみで掘削は行っていない。幅約1.5mが検出された。上層の埋土から瓦はほとんど見られない。

**溝SD0226・SD0228・SD0229**　掘立柱建物SB0220の柱穴を一部破壊して掘り込まれる溝である。SD0226は東へ延び，築地基底部・内外溝も切っている。中世以降の区画に伴う溝と考えられ，SD0226・SD0229が先行し，SD0228は後に掘削される。平面的な確認のみであるが，溝の底面近くのみが残存していると考えられ，幅0.3～1.0mと一定せず浅いものと思われる。

SD0228・SD0229はNo.3トレンチのSD0295に連続するとみられる。　(林)

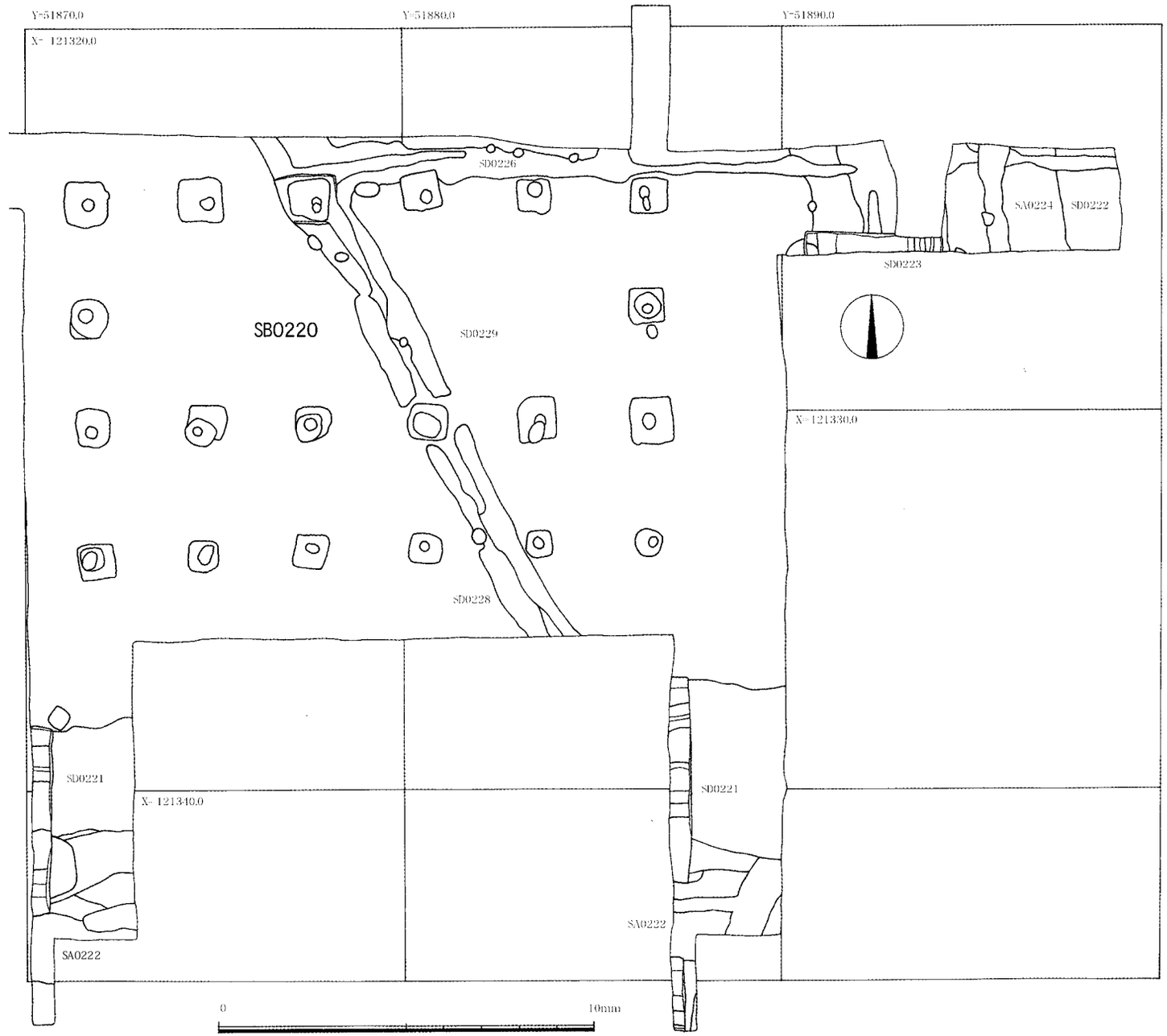



Fig.28　南東隅調査区遺構配置図　(1:160)

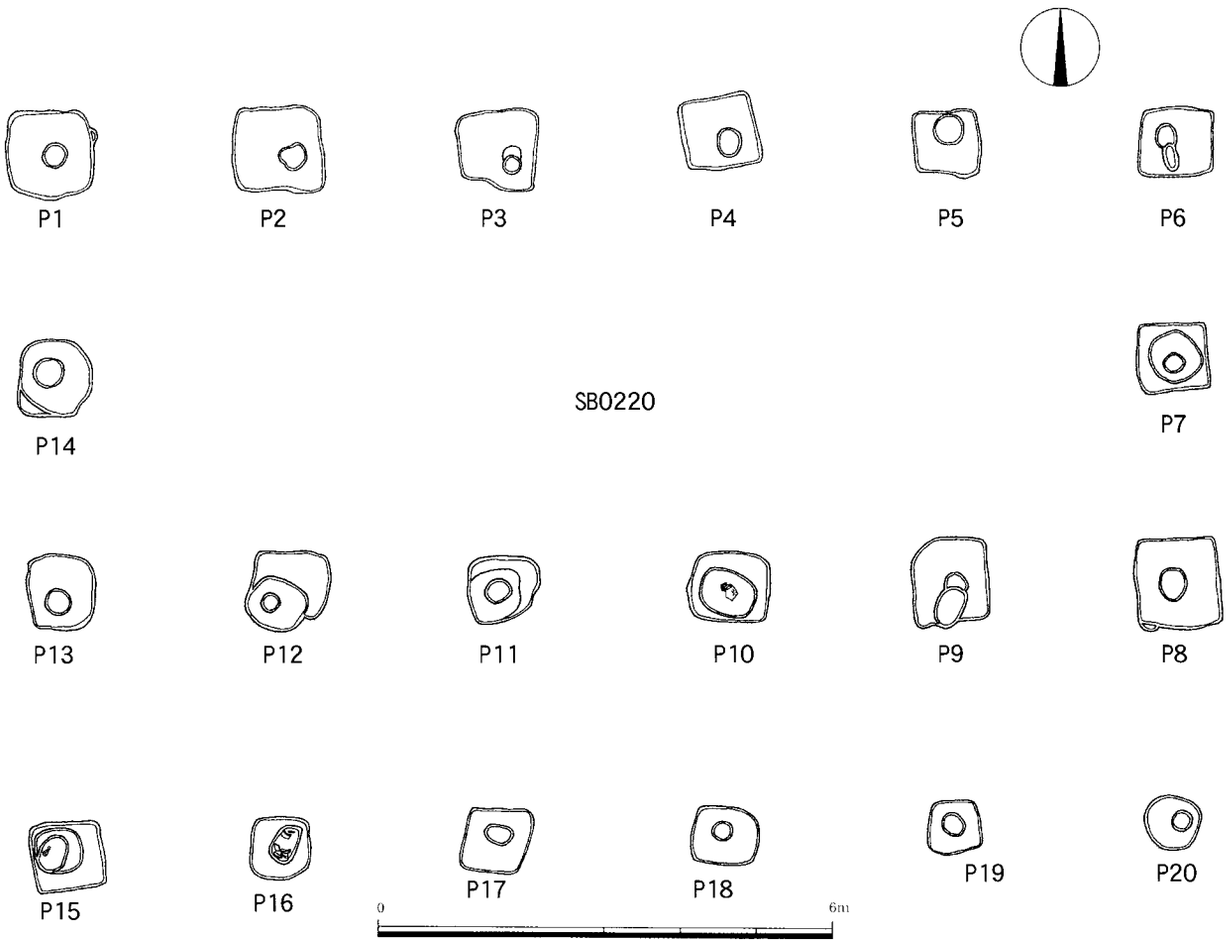



Fig.29　SB0220 平面図　(1:100)

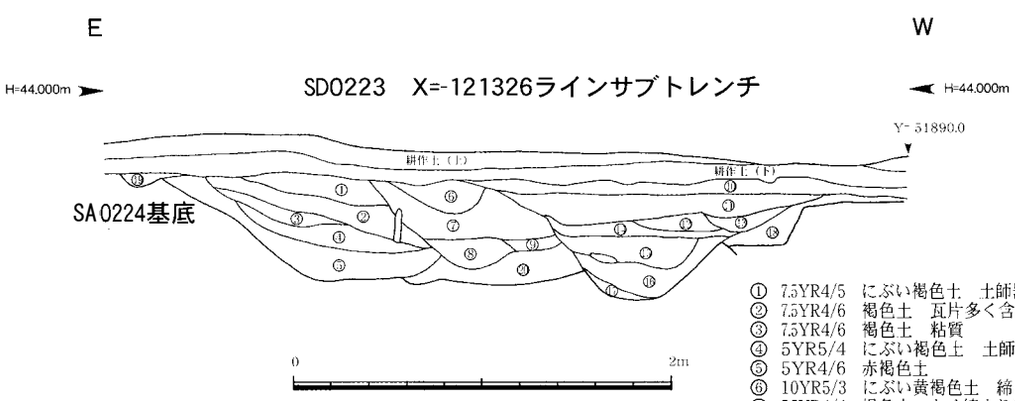
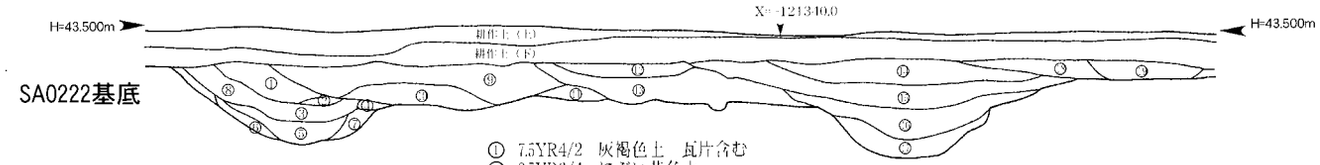



Fig.30　南東隅調査区セクション図(1)　(1:40)

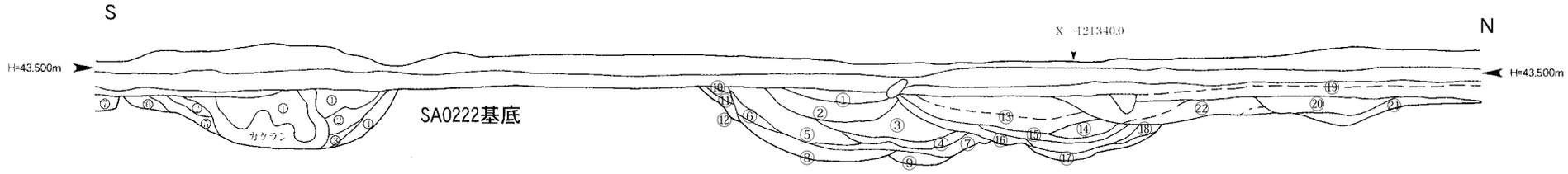
① 7.5YR4/5　にぶい褐色土　土師器　瓦片わずかに含む
② 7.5YR4/6　褐色土　瓦片多く含む
③ 7.5YR4/6　褐色土　粘質
④ 5YR5/4　にぶい褐色土　土師器片含む
⑤ 5YR4/6　赤褐色土
⑥ 10YR5/3　にぶい黄褐色土　締まり無く、瓦片多い
⑦ 7.5YR4/4　褐色土　よく締まり緻密、瓦細片少し含む
⑧ 5YR5/6　明褐色土　よく締まる
⑨ 7.5YR5/6　暗褐色土　締まりは無い
⑩ 7.5YR4/3　褐色土、粘質、よく締まる
⑪ 7.5YR4/3　褐色土、瓦細片多く含む
⑫ 7.5YR4/4　褐色土、締まりはない
⑬ 7.5YR4/6　褐色土、やや粘質、瓦片含む
⑭ 5YR5/6　明褐色土
⑮ 7.5YR5/4　にぶい褐色　瓦片、1cmほどの礫多く含む
⑯ 10YR6/6　明黄褐色　緻密で粘質
⑰ 7.5YR5/4　にぶい褐色土　やや粘質
⑱ 7.5YR4/4　褐色土
⑲ 7.5YR4/3　にぶい褐色土　緻密で粘質
⑳ 10YR5/4　にぶい黄褐色土に7.5YR4/6褐色土が混じる

## SD0221　Y=51870ラインサブトレンチ




① 7.5YR4/2　灰褐色土　瓦片含む
② 2.5YR6/4　にぶい黄色土
③ 7.5YR4/6　褐色土　粘質
④ 2.5YR6/4　にぶい黄色土
⑤ 7.5YR4/3　褐色土　粘質で炭含む
⑥ 5YR4/4　にぶい赤褐色土
⑦ 5YR4/4　にぶい赤褐色土　粘質
⑧ 7.5YR4/4　褐色土
⑨ 7.5YR4/3　褐色土　大ぶりの瓦片含む
⑩ 7.5YR5/6　明褐色土
⑪ 10YR5/4　にぶい黄褐色土
⑫ 7.5YR5/6　明褐色土
⑬ 7.5YR5/4　にぶい褐色土　瓦片含む
⑭ 7.5YR4/3　褐色土　締まり無く、瓦片がほとんど
⑮ 7.5YR5/4　にぶい褐色土　粘質　大ぶりの瓦片含む
⑯ 10YR5/4　にぶい褐色土　須恵器、瓦片含む
⑰ 10YR5/2　灰褐色土、粘質
⑱ 7.5YR5/4　にぶい褐色土　焼土・炭含む
⑲ 7.5YR5/6　にぶい褐色土　粘質で焼土・炭多い

## SD0221　Y=51887ラインサブトレンチ




① 7.5YR5/8　明褐色土　締まり無い
② 2.5YR4/4　褐色土　粘質
③ 7.5YR5/6　明褐色土
④ 5YR5/4　にぶい赤褐色土　締まり無い
⑤ 7.5YR5/6　明褐色土
⑥ 7.5YR5/4　にぶい黄褐色土
⑦ 10YR5/4　にぶい黄褐色土　粘質

0　2m

① 10YR4/6　褐色土　粘質
② 7.5YR5/4　にぶい褐色土
③ 7.5YR5/4　にぶい褐色土　粘質、瓦片多い
④ 10YR4/6　褐色土　粘質、よく締まる
⑤ 7.5YR5/4　にぶい褐色土
⑥ 7.5YR4/6　にぶい褐色土　粘質
⑦ 10YR4/6　褐色土に2.5YR6/6　明黄褐色土混じる
⑧ 7.5YR5/4　にぶい褐色土　粘質
⑨ 7.5YR5/6　明褐色土に2.5YR6/6　明黄褐色土混じる
⑩ 10YR4/3　にぶい褐色土　やや砂質
⑪ 7.5YR4/4　褐色土
⑫ 7.5YR5/4　にぶい褐色土　綿密
⑬ 7.5YR5/4　にぶい褐色土
⑭ 7.5YR5/6　明褐色土　瓦片含む
⑮ 7.5YR4/3　褐色土　綿密
⑯ 7.5YR4/4　褐色土
⑰ 7.5YR5/3　にぶい褐色土
⑱ 7.5YR5/4　褐色土に7.5YR5/8　明褐色土ブロック
⑲ 7.5YR4/4　褐色土　よく締まる、炭含む
⑳ 7.5YR4/6　褐色土　やや粘質
㉑ 7.5YR4/4　褐色土に5YR6/8　橙色土ブロック含む
㉒ 7.5YR4/4　褐色土

Fig.31　南東隅調査区セクション図(2)　(1:40)

# Ⅲ．まとめ

**南門**　南門は1991年の西高木2調査区で検出されたテラス状遺構SX01が基壇の一部と見られていたが，25-2次調査と今回の28次調査でそれが確認された。

基壇は,中門から26.1m，ほぼ88尺(26.07m)の距離に位置する。予想以上に削平され基礎地形もほとんど残存していなかった。基壇規模は溝SD0142･SD0143・SD0144そして西高木2調査区のSD05といった外周溝から判断するしかない。復元された基底の形状は，長方形の四隅を斜めに切り落としたような東西に扁平な八角形状を呈する。このような例は他に類を見ない。この平面プランが上部構造まで影響を与えていたのかが，今後の検討課題となる。外周溝は，その深さから雨落ち溝とは到底考えられない。また，下層まで瓦を含み改修の際に最掘削されたものと思われる。

基壇の南北幅は11.2m，東西幅は17.6mを測り，およそ38尺×60尺と推定される。

基壇南面では外周溝SD0144が途切れている。門の推定主軸をもとに折り返すと幅7m前後の陸橋状の構造SC0152が想定され，1997年の6BIA-C.D.E.F区調査の際に検出された南北溝とも対応するため，南門から南へ延びる道路が存在したと推定される。

北面においても，対応するように溝SD0142・SD0143の幅がおよそ7mの間で1mに狭まっている。中門に至る通路の幅を示すものであろう。

南門に取り付く築地は幅全体を検出できなかったが基底部幅が3m(10尺)と推定される。

また，1997年の6BIA-C.D.E.F区調査の際に柱穴列SA-Xが検出されている。この柱穴列は南門基壇南辺から南に4m離れ平行するもので，8間分が検出されているが，おそらく更に西に1間分が推定される。すると幅がほぼ南門基壇と等しくなる。足場穴とみるには距離が離れすぎているので，南門の改修の際等に伽藍地内部が見通せないように設置された目隠し塀などの可能性が考えられる。この柱列の振れが，伽藍中軸線の振れを反映しているとすればおよそN1°40′Wといった数値が求められる。

**南門出土の瓦類**　出土した軒丸瓦は，単弁八葉蓮華文軒丸瓦ⅡA03・ⅡA04型式がほぼ同数である。外縁を切り取ったものが存在し，他の調査区の例からⅡA03型式と考えられるが,破片での区別は困難である。軒平瓦には均整唐草文ⅡB01・ⅡB02型式がほぼ同数出土している。また，瓦廃棄土坑からではあるが鬼瓦が3点出土した。前田論文による伊勢国分寺Ⅰ式が1点，Ⅱ式が2点である。

**築地SA0203・SA0206**　塔推定地調査区では，2条の平行する東西溝SD0205およびSD0209・SD0216が検出された。溝間は，全く削平され上部構造をうかがえるような遺構は全く存在していないが，外周築地も同様であるため，これを塔院の築地と考えて追跡した。しかし，結果としてこの築地SA0203は伽藍地の東辺築地SA0219から西に約60m延び、そこで別の平行する溝SD0210・SD0212から推定される南北方向の築地SA0206と「卜」状に交わっていることが確認できた。つまり、築地SA0206は伽藍地の東側約1/3を区画し，さらにSA0203が南北2つの院に区画しているものと考えられる。

南北方向の築地SA0206と中心伽藍主軸および東辺築地SA0219の距離(芯々)はそれぞれ約53m，64mを測る。東西方向の築地SA0203と南辺築地SA0222間の距離は約96mを測る。

築地SA0203の北側溝SD0209とSD0216との間は約7m途切れ陸橋状になっている。築地SA0206とSA0219のほぼ中間地点にあたり，ここに両院の間を結ぶ小規模な門が存在していた可能性がある。しかし，基礎地形さえ残存していないので推定の域を出ない。すぐ脇のSD0216のサブトレンチからはまとまって土師器甕類の破片が出土している。

これら築地SA0203とSA0206の築造時期を示す遺構としてSK0213がある。SK0213はその検出された位置から，SA0206に先行するとみられる。埋土からは瓦片ととも須恵器坏蓋が出土し,8世紀後葉から9世紀初頭の年代が考えられる。よって，SA0206の築造は9世紀代に降ると判断せざるを得ない。また，使用されていたと推定される瓦類も以下に述べるように，新しい様相を示している。

金堂・講堂は基壇の地形の切り合い関係から少なくとも1回の大改修が行われたことが明らかになっている。中門も前面の瓦廃棄土坑から改修が行われ,出土した遺物から9世紀前半以降と推定している。築地SA0203とSA0206はこれらの大規模な改修に併せて,新たに整備されたものと考えられるのではないか。

**塔推定地調査区出土の瓦**　出土した瓦類は大部分が道路遺構のバラスとして利用されたものや後世の溝に投棄されたもの等撹乱されたものであって，建物への帰属が明らかなものは極めて限られる。可能性として，軒瓦類の

組成に他の伽藍や外周築地では見られない特性があることからみて，築地SA0203・SA0206およびそれに付属したと推定される門が考えられる。

軒丸瓦では他伽藍と共通して見られるⅡA02・ⅡA03・ⅡA04型式の数を圧倒して,新型式の十一葉蓮華文ⅡG01型式が量的にまとまって出土している点が注目される。ⅡG01型式は文様や技法の退化から後出的なものとみられ，時期的にも降ると考えられる。

軒平瓦では，他伽藍に通有のⅡB01型式のほかに，数は少ないがⅡB04・ⅡB13そして飛雲文と仮に呼ばれる変形唐草文など多様な型式を含む。後者はいずれも文様が退化･形骸化した，後出の型式である。

さらに，鈴鹿市広瀬町の伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）で用いられた重廓文軒平瓦類ⅠA2・ⅠA3・ⅠA4・ⅠA6型式が先に述べた国分寺系の均整唐草文軒平瓦とほぼ同数出土している点である。出土した鬼瓦3点のうち2点が伊勢国府Ⅰ式であること，伊勢国府跡と共通する刻印瓦が多数出土したことを併せて，これらの瓦類は国府瓦の転用と考えて間違いなかろう。

広瀬町の国府の存続期間は短く8世紀後半～9世紀初頭には廃絶したと考えられている。廃絶に伴い不要となった瓦が，国分寺伽藍地内の整備に際して大量に持ち込まれたと考えれば，SA0203・SA0206の整備時期を考える一つの手がかりとなろう。

**掘立柱建物SB0220**　回廊東トレンチ調査に伴い，伽藍地南東隅から大型の掘立柱建物柱穴列が検出された。規模が大きく，方位が中心伽藍と揃うことから国分寺に伴う重要な施設と考え，南東隅調査区として面的に調査した。

検出された掘立柱建物SB0220は，伽藍地南東隅に収まるように建てられた，南面に庇を持つ2間×5間の大型建物である。SB0220の北平は14.72m，東妻は5.98m，庇の出は3.17mを測り，柱間は身舎が10尺，庇の出が11尺であろう。各柱間から平均して求められる1尺はおよそ29.6～29.7cmである。

建築の時期を積極的に示す遺物の出土は無いが，建物の位置・方位が築地塀の隅に合わせられていることと，柱掘方からは瓦片が出土せず，柱痕･柱の抜き取り穴からは瓦が出土している点からも，国分寺の創建と同時期と考えてよいのではないだろうか。

このような伽藍地の南隅に建てられた大型掘立柱建物としては上野国分僧寺において，南西隅に建てられた4間×2間の二面庇建物SB12が知られている。国分寺創建期のもので，塔と方位を同じくするとされる。仮設的な仏堂の例とする見解もある。

伽藍地内における大型掘立柱建物の性格として①正式な仏堂が完成するまでの仮設的な仏堂，②寺院の運営にかかわる政所院・大衆院等，③講師・読師等が居住する講師院等，④造営にともなう寺務所等といった施設の可能性が考えうる。（註10）

政所･大衆院についてはこのSB0220を除いて回廊東のトレンチ調査の結果ほとんど建物が検出されていないことから，SA0203北側の院に所在すると考えた方が妥当と思われる。その他についても調査で性格を特定できるような遺物は出土していない。

南東隅調査区の一部を拡張して伽藍地東辺築地SA0224(0219)と及び南辺築地SA0222を検出した。

東辺築地は内側溝SD0223の肩がはっきりしているため，塔推定地調査区での東辺築地SA0219の内側溝SD0217との肩の間で振れを求めるとN1°10～20′Wが得られる。

**最後に**　今回の調査においては南門の規模を確定したほかに，塔推定地調査区では伽藍地内を区画する築地を，そして伽藍地南東隅では国分寺創建期とみられる大型掘立柱建物を検出するなど国分寺伽藍地内の利用を考える上での貴重な知見が得られた。

しかし，調査の当初の目的であった塔関連遺構の確認については，広域的なトレンチ調査含めて実施したにもかかわらず確認には至らなかったのは残念であった。①塔推定地調査区の南方に塔が立地したが，後世の耕作や水田化により完全に削平された。②回廊内など未調査部分に存在する。③本来塔が存在しない，つまり国分尼寺である。以上の3点の可能性が考えられる。

瓦の散布状況やスペースから見て塔検出の条件は徐々に厳しくなっているが，②の可能性を信じて，次年度も探索を進めていく予定である。　（藤原）

（註10）国分寺伽藍地内の施設については石毛彩子氏にご教示並びに資料の提供をいただいた。

Plate1

南門全景（東から）

塔推定地調査区全景

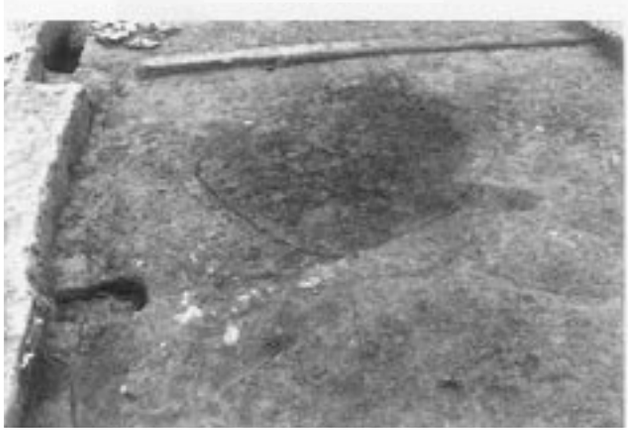
塔推定地調査区（東から）

南東隅調査区（大型掘立柱建物 SB0220）

南門全景（西から）

作業風景

瓦堆積状況



外周溝 SD0143（東から）

外周溝 SD0143（西から）

SD0143 サブトレンチ（東）

SD0143 サブトレンチ（西）

外周溝 SD0142（西から）

外周溝 SD0143（東から）

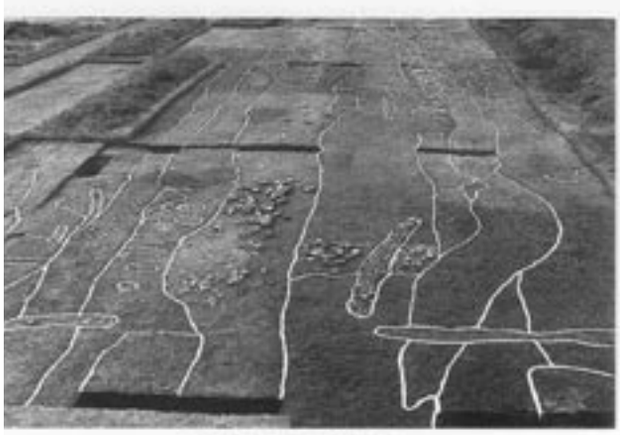
土坑 SK0148（南から）

D ～ F8 調査区全景（東から）

溝 SD0144（西から）

現地説明会

塔推定地調査区（東から）



築地 SA0203（東から）

築地 SA0206（北から）

掘立柱建物 SB0232（南から）

竪穴住居 SI0231（西から）

道路状遺構 SC0204（東から）

竪穴状土坑 SI0235・SI0236（西から）

溝 SD0244（南から）

溝 SD0205 瓦出土状況（西から）

土坑 SK0239 ～ 0242（東から）

築地 SA0219（南から）

溝 SD0217 サブトレンチ（南から）

土坑 SK0242 サブトレンチ（東から）

溝 SD0205（東から）

溝 SD0209（西から）

溝 SD0205 サブトレンチ（東から）

溝 SD0215・0216 サブトレンチ（東から）

溝 SD0207 サブトレンチ（東から）

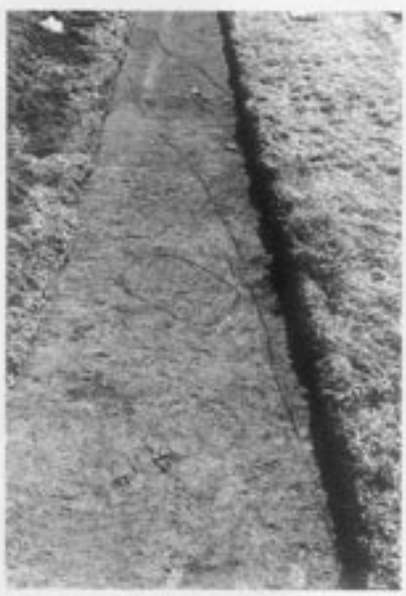
回廊西 No.4 トレンチ（南から）

掘立柱建物 SB0280（南から）

回廊東トレンチ全景（南から）

土坑 SK0287・SK0288（北から）

土坑 SK0283・溝 SD0290・SD0291（南から）

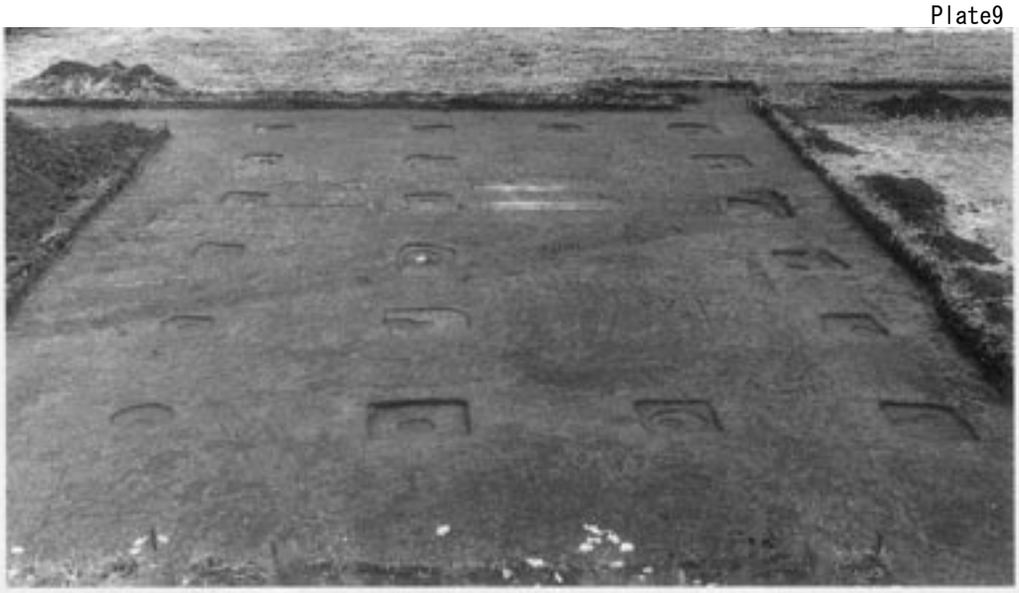


土坑 SK0285・溝 SD0297（北から）

回廊東Ｎｏ．５トレンチ（南から）

回廊東Ｎｏ．２トレンチ（南から）

回廊東Ｎｏ．１トレンチ（南から）



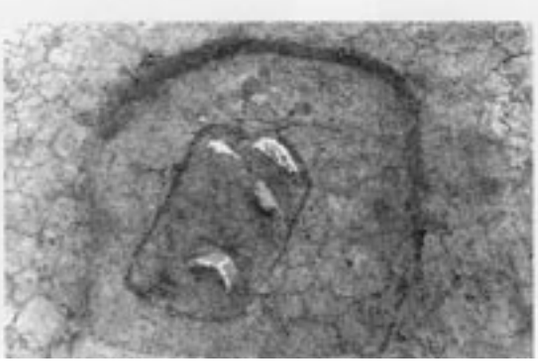
掘立柱建物 SB0220（東から）

掘立柱建物 SB0220（西から）

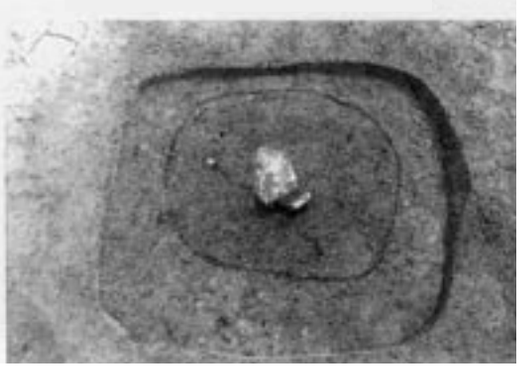
築地 SA0224（北から）

溝 SD0223 サブトレンチ（北から）

溝 SD0221 サブトレンチ（東から）



掘立柱建物 SB0220　P-16（北から）



掘立柱建物 SB0220　P-10（北から）

Plate10

22

23

25

26

14

17

28

29

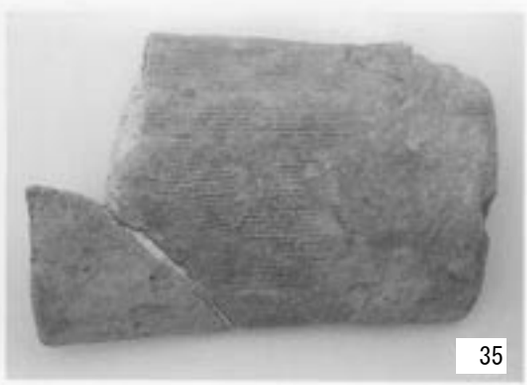
30

31

32

33

34


35

39

40

45

46

47

50

51

52

56

57

58

59

60

61

66

67

68

Plate15

69

71

72

73

75

76

67

67

Plate16

81

82

83

84

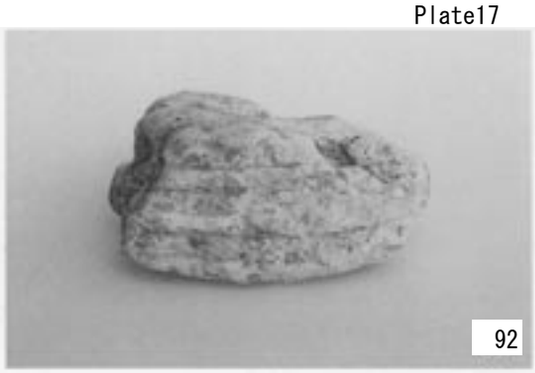
85

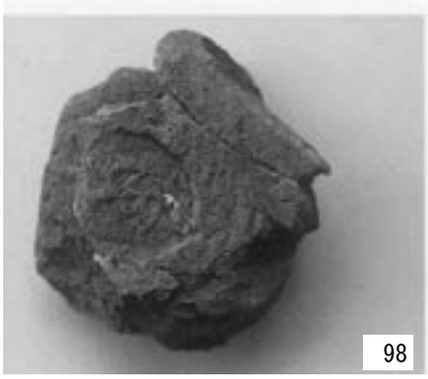
87

88

89

Plate17





101

102

103

104

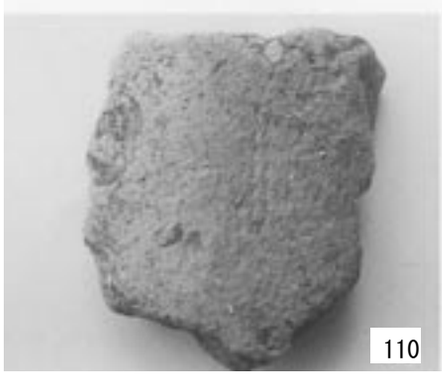
105

106

107

108

109


110

111

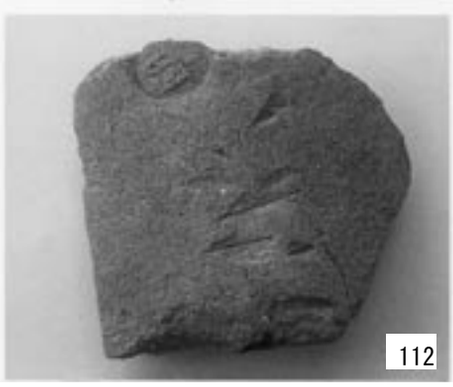
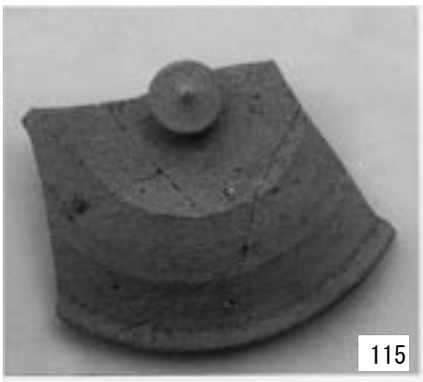
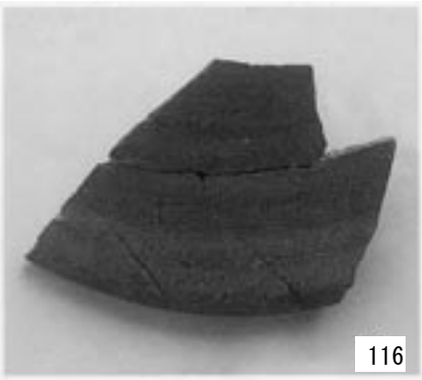
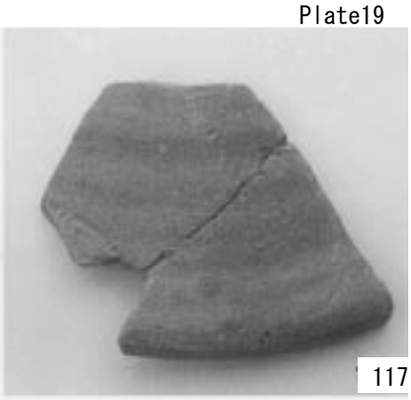
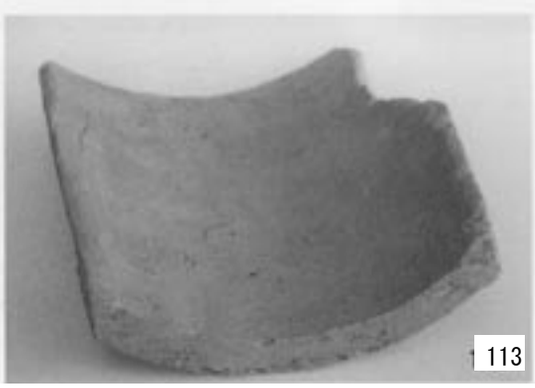

112

Plate19





# *Ise Kokubun-ji Temple Site Preliminary Report Ⅲ*

Table of Contents

Introductory remarks
Chapter1 Introduction 1
Chapter2 Structual features and artifacts 6
1 South gate 6
2 East side of the golden hall 16
3 Trial trenching of the pagoda 31
4 Southeast corner of the temple area 34
Chapter3 Conclusion 38
English table of contents and summary 59

## Summary

Kokubun-ji Temple was built in each Province by Emperor Shomu' s imperial edict in the middle of 8th century. The temple consists of a monastery and nunnery. Ise Kokubun-ji Temple site is on a parcel of land which is located at the left bank of Suzuka River in Kokubu-town, Suzuka-city.

Suzuka-city board of education carried out identification research to protect the remains from 1988 to 1990. They identified the temple compound area which is surrounded by the tamped-earth walls with roofs, each of which measures approximately 180 meters long. After the results of the research were documented, almost all of land of the remains had been switched to public-owned land from 1996 to 1998.

Research to find the locations of buildings were carried out in 1999. This was to make plans to improve the site as a park of historical site. The 22nd to 25th researches were already carried out and the location and size of the lecture hall, the golden hall, main gate and the cloister were identified.

On this 28th research, the board of education tried to identify the locations of the south gate and to find the site of the pagoda, which had not been identified yet.

The south gate was one of the important entrances of the temple. The location of the south gate was identified 26 meters south of the main gate. The foundation platform of the south gate was almost perfectly scraped out and only the ditches that surrounded the south gate currently remain. Estimated size of the south gate is approximately 18 meters from west to east and 11 meters from south to north. The land to the south gate has eight corner which looks like a rectangle with all the four corners are cut out. There are no similar examples that exist.

There is a spot at the east side of the golden hall where a lot of tiles are scattered. Since we predicted that the pagoda was located in this spot because of the scattered tiles, we designated the spot as the place for our excavation. However, we couldn't find the foundation platform of the pagoda, but found two rows of the tamped-earth walls instead.

The tamped-earth wall (SA0206) extends to the directions of north and south and is located about 53 meters away from the axis line of the golden hall to the east. The tamped-earth wall (SA0203) which expands in the directions of east and west is 64 meters and connects to both the tamped-earth wall(SA0206) and the tamped-earth wall (SA0219) which is located at the east

side of the temple compound area.

The distance between the tamped-earth wall (SA0203) and the tamped-earth wall (SA0222) which is located at the south side of the temple compound area is 96 meters. The width of the base of the tamped-earth walls is 2.7 meters. The above-mentioned two rows of the tamped-earth walls divide the east part of the temple compound area into two sections to the north and south directions. The administrative facilities for the temple must have been located in each of the two sections.

Although we made seven trenches to the east and one trench to the west of the cloister while looking for the pagoda, we couldn't find the foundation platform anywhere.

We found a large-sized embedded-pillar building at the southeast corner of the temple compound area while excavating the trenches. The size of the core of the building is 15 meters from the east to west and 6 meters from the north to west. The distance between the pillars is 3 meters. The building had eaves which measure 3.3 meters on the south side of it. The building was built in the direction which is in harmony with that of the main temple compound and the tamped-earth walls. It seems that the building was an important relevance for the temple and must have been built in the period the Kokubun-ji Temple was founded.

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | いせこくぶんじあと3 |
| 書　　名 | 伊勢国分寺跡3 |
| 編 著 者 名 | 藤原秀樹（ふじわらひでき）　林（はやし）　和範（かずのり） |
| 編 集 機 関 | 鈴鹿市教育委員会　鈴鹿市考古博物館 |
| 所　在　地 | 〒513-0013　三重県鈴鹿市国分町（すずかしこくぶちょう）２２４番地　　０５９３（７４）１９９４ |
| 発行年月日 | 西暦２００３年3月３１日 |

| 所収遺跡名 | 所　在　地 | コード | | 北　緯 | 東　経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| いせこくぶんじあと<br>伊勢国分寺跡 | みえけんすずかし<br>三重県鈴鹿市<br>こくぶちょう　どうあと<br>国分町字堂跡<br>282・283・284・285・286・287・288・290・291・293<br>にしたかぎ<br>字西高木229・230 | 24207 | ３６１ | ３４°<br>５４′<br>３２″ | 136°<br>３３′<br>５０″ | 2002.5.9.<br>～<br>2003.2.28 | 1,891 | 学術調査<br>史跡整備 |

| 種別 | おもな時代 | おもな遺構 | おもな遺物 | 特　記　事　項 |
|---|---|---|---|---|
| 寺院 | 奈良・平安 | 南門<br>築地<br>掘立柱建物<br>竪穴住居，溝，土坑 | 軒丸瓦，軒平瓦　鬼瓦，丸瓦，平瓦，塼，須恵器<br>土師器，山茶碗<br>灰釉陶器，石斧 | 伊勢国分寺跡の南門基壇を確認。金堂の東部では伽藍地内を区画する築地2条を検出。伽藍地南東隅から大形掘立柱建物を検出。 |

北緯・東経は講堂跡前の基準点No.2の位置(世界測地系による)

# 伊勢国分寺跡３


| | |
|---|---|
| 発　行　日 | ２００３年３月３１日 |
| 編集・発行 | 鈴鹿市教育委員会 |
| | 鈴鹿市考古博物館 |
| | 〒５１３－００１３ |
| | 三重県鈴鹿市国分町２２４番地 |
| | TEL０５９３（７４）１９９４ |
| | FAX０５９３（７４）０９８６ |
| | E-mail：kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp |
| | URL：http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/ |
| 印　　刷 | (有)三鈴印刷 |

# Ise Kokubun-ji Temple Site

## Preliminary Report No.3

March, 2003

Suzuka City Board of Education

Mie Pref., Japan